

A decorative border made of stylized bamboo stalks and leaves in various shades of green, framing the central text area.

令和3年度（2021年度）

第11号

読書会感想文集

『竹の音』

竹原読書会

2021年度
開催日・課題本・担当者

開催日	課題本	著者名出版社	担当者
4月14日(水)	『絵本 ことばのよろこび』1995	松居 直 日本基督教団出版社	
5月12日(水)	『鬼の橋』1998	伊藤 遊 福音館書店	
6月 9日(水) (中止)	『蓮如 われ深き淵より』1996	五木 寛之 中央公論社	
7月14日(水)	『渦 妹背山婦女庭訓魂結び』2019	大島 真寿美 文藝春秋	
8月11日(水)	『ある男』2018	平野 啓一郎 文藝春秋	
9月 8日(水) (中止)	『雪ぐ人 えん罪弁護士 今村核』 2018	佐々木 健一 NHK 出版	
10月13日(水)	『ねがいは「普通」』2002	佐藤 忠良 安野 光雅 文化出版局	
11月10日(水)	『ポプラの秋』2015	湯本香樹実 新潮社	
12月8日(水)	『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』2009	加藤 陽子 朝日出版社	
1月12日(水) (中止)	『生きて帰ってきた男—ある日本兵の戦争と戦後』2015 関連本『ヒロシマ消えたかぞく』2019	小熊 英二 岩波書店 指田 和 ポプラ社	
2月 9日(水) (中止)	『みんなで学習会』		
3月 9日(水)	『2021年度 私の一冊』		

2021年4月

課題本 『絵本・ことばのよろこび』

松居 直/著 日本キリスト教団出版局 1995年

読書会を終えて

講師 吉川五百枝

松居 直氏は、「神のことば」を、生きることの基とされるクリスチャンです。『絵本・ことばのよろこび』は、クリスチャンの彼の思いに貫かれていますから、たくさんの「ことば」が、聖書に裏打ちされた「神のことば」に照らされて、降り注いでいます。

「神のことば」を知らない私でも、この本には共通感覚とも言える場面がいくつもありました。その中の一つは、「ことば」について 182 ページを費やして書かれた最後の章でくほんとうの「音」は静寂の中にあるのです」という体験です。

松居氏は、その事を、インドのエローラを訪れ、石窟寺院群で体験されました。私も、エローラを二度訪れていますが、そこは、また海外を旅する事ができるなら、もう一度行きたいと思っている場所です。

デカン高原の岩の台地を上から掘って、まるで岩の大寺院を台地から掘り出した感じがするカイラーサナータ寺院や、垂直な崖に掘られた石窟寺院群が並び、仏教、ヒンドゥー教、ジャイナ教の重なりを感じる場所です。

私も、そこで静寂を体験しました。初期の仏教は、自己の救済を追求する思想でしたから、瞑想を目的とするヴィハーラ石窟が掘られています。松居氏は、そこで笛の音を聞かれたようですが、それは、静寂を演出してくれたことでしょう。

かつて、そこで瞑想する僧達に聞こえていた「ことば」は、無音だったのでしょうか。人間にとっての無は、笛の音が指し示しているように「無」だけでは成り立ちません。発せられたことばを自分のものとして聞くためには「無音」と同時に立ち上がる「有音」が必要です。当時、辺りからは静寂と名付けられても、僧達には「釈尊のことば」が獅子吼の大音響ではなかったかと思えます。「エローラ」ということばが贈ってくれた、この本の締めくりとなる靖かなあたたかさでした。

50 年程前、この地でおとなの読書会を始めてすぐに、子どもの読書の手伝いが出来ないかなと思いました。地域の人とグループになって、大きな風呂敷を持って電車で広島へ本を借りに行く活動から始まりました。そして、形を変え、広がりながら今日に至っています。その間、福音館書店の絵本に随分であいました。

「おもしろくて ためになる」という講談社のキャッチフレーズが有名になり、岩波書店、偕成社など、今も健在な出版社がありますが、反面、至光社、銀河社など小規模の出版社は、

期待できる本の著作権を譲り渡して名前を消していきました。

そういう中であって、福音館書店の絵本は別格のようでした。松居氏のエッセイや絵本、講演は、絵本に目を留める人達の間では、まるで灯台が進路を示すように、導き手の如く語られたものです。

私自身の子ども時代は、まだ戦後の復興が進まず、義務教育終了まで、学校図書館と貸本屋が読み本の供給源でした。小遣いで手に入れるのは、毎月の雑誌位のもので、疎開から帰ってきたのは大人にしか読めぬような漢字がいっぱいの厚い本達です。近所の家でも疎開帰りの本があって、私でも読める本にひかれて、よく遊びに行きました。

「子どもの本」「子どもの読書」などのことばにであったのは、自分の子ども時代をずいぶん離れてからの事です。

おとなになってから、子どもでも読める本の出版が飛躍的に伸びて、おかげで今日まで、長い間、良い思いをしてきました。今回の『絵本・ことばのよろこび』に紹介されている絵本は、ほとんど昔からの“おなじみさん”で、「まだ生きていますよ」とお互いに言い交わすようでした。

松居氏は〈絵本は、子どもに読ませる本ではなく、大人が子どもに読んでやる本〉だと言われています。大人であれ子どもであれ、文字の部分と絵とを同時に見る事は難事ですから、1000年前の宮中のように、女房に絵物語の詞書きをよんでもらい、姫君は聞きながら絵を見るというスタイルが理想的なのかなと思います。(もちろんこの際は自分は姫君の方です!) 詞書きをよんでくれる女房は、ナマリでなければなりません。どこにどんな物語があるかよく知っていて、想像しながら声に出すのが大好きで、姫君最良である事などと条件をつけましょう。(自分が女房の方だったら?... 断然がんばります!)

松居氏は〈あなたの中に創り出すことばのよろこび〉と言われます。

誰かに向かってことばを発することが、その人の中によろこびを創ることになればそれは好ましい事だと思います。松居氏がこのように絵本を作られたり、文章を書かれることは、自分の内側から溢れ出たよろこびの贈り物なのかもしれません。でもそれは、松居氏が、経済的にも社会的にも恵まれているからそうできるわけではないでしょう。本というものが持っている無機質な性格の部分を見ると、本の前に立つとき、その人の生い立ちや環境が本を動かすとは思えません。本に向かい合う人に、本は何も求めないし、また、相手がどうであろうと何も変えません。受け取る人まかせです。

ことばのよろこびは、贈られるものであろうとも、自分の中に創り出さなければ自分にとっての“おいしいことば”にも“輝くことば”にもならないだろうと思います。

ことばは、送り主に由来するのではなく、自分の中で自分用のことばを創り出す受け取り方に由来するものではないでしょうか。共感でも、批判でも、自分を豊かにする受け取り方をしたいだけです。

本を読んで貰うのは、子どもだけにいえることではありません。読書は、一生涯を通じて「聞く読書」をしていることだと考えています。自分ひとりで読んでいるようでも、文章を読み語り(読み聞かせ)してくれているもう1人の自分がいます。これまでの経験を活かして生涯読み語ってくれるもう1人の自分を大事に育てなければと思います。

読書会の余韻の中で「三行感想」

◆【 YA 】

絵にも、ことばにも いのちというか私達にしっかりと届けるものがある。

特に、ことばは人そのものであり、絵は人の内面だったり、人の創造的な作品であり、自由が広がる世界だと思う。

又この本を通して、作者の人としての考え方、生き方が底にキリスト教の宗教観がゆったりと流れているのではないかと。

又1951年福音館発行『仏教からキリストへ』の全国の大学を含めて学校への献本の文書伝道を知って、とても驚いた。

絵本に限らず、読物は毎日の生活の一部として、すっかり溶け込んでいる。

◆【 KT 】

「絵本は読ませるのではなく読んでやる本です。」「学校教育を受ける前に人の話を聞く態度をつけておくことが大切。」「おいしいことばをたっぷり食べさせていますか。」など自分がしてこなかった事ばかりで、心の痛い本だった。

たくさんの絵本紹介があり、ゆっくり読んでみたいと思う。

◆【 T 】

「絵本の旅を共に楽しむ」(19P) 素敵な言葉です。読み手の感動が子どもに伝わり、子どもの喜びが読み手に伝わる。二人を包む空間は心地よい、楽しい、幸せな空間になるでしょう。

絵本をあまり読んでいなかったのですが、この本の中で勧められていた、『にぐるまひいて』を読んでみました。日々の丁寧な暮らしの中で感じられる充実感・家族の信頼感…こんな生活をしてみたいなど感じました。大人も絵本で感動できます。

◆【 N2 】

久しぶりに絵本に触れました。

子供達に読んでいた頃を思い出しましたが、最近の本のカラフルなこと、大人が読んででも楽しく、大人の絵本ブームが起ったのも納得です。

私も自分の為に絵本を読もうと思います。

◆【 MS 】

20年前、絵本の研修会で、保育士さんが「子供達に読む絵本の基準は？」と質問された。すると講師が「それは選者の品格と感性です。そのためには自分を磨き続けるしかありません」と言われた。当時の私には強烈な言葉だった。その後、絵本だけでなく絵本に関する本を手にするようになり、松居直さんの多くの著書に感銘を受けた。絵本を目の前に

する子どもたちの反応に、松居さんが書いておられた通りの表情だと驚いたものだった。彼は時代が移ろうと、絵本という不思議な世界のなかに秘められている真実や、その力や働きを見出す感性や知性は変わらない。

今回の課題本でも、キリスト教に裏打ちされた日常生活や福音館書店創業者や編集者として学んだ中から、絵本一冊一冊の魅力を様々な観点から選書し、魅力をたっぷり語っている。思わず手元にはない絵本や本を買い求め、読み漁ってしまった。『にぐるまひいて』『エミリー』『もりのなか』などの素晴らしさを再確認し、エッツやモーゼスおばあさんの生き方に敬服した。心は自然と穏やかになり幸せな時間を過ごした。

「選本は、選者の品格と感性」ということばは、私にとってバイブルであり、未来へのことばである。

『絵本・ことばのよろこび』を読んで

◆【 c 】

最近、よく思う。私に必要なものが、絶妙なタイミングでやってくるなあ、と。この本もその一つである。というのも、著者の松居直？う～ん、どこかで聞いたことあるぞ…あつ、『こぶじいさま』！

実を言うと、子育てするまで絵本にはさほど興味はなかった。でも今、4才の娘に読み聞かせているうちに、だんだん絵本がおもしろくなっていた。

それに気がつかせてくれたのは、松居直(著)・赤羽末吉(絵)『こぶじいさま』。鬼が踊って歌う歌がなんだかおもしろく、2人で覚えてしまって、時々口ずさむ。

一くるみは ばっぱ、ばあくづく、
おさなぎ、やあつの、おっかあかあ、
ちやあるるう、すってんがあ、
一ぼこ、二ぼこ、三ぼこ、四ぼこ…

意味はよくわからなくても、適当にリズムにのって歌うと本当に楽しい。絵本って、声に出して読むべきもの、そしてただ読みあげるのではなく、誰かのために読むようにできていて、そうしてはじめて絵本の本領(?)が発揮できるのだ、とその時感じた。絵本を通して、私にそのことを気がつかせてくれたのが、松居氏だったという驚き。松居氏の思うように絵本の世界に導かれたのだと、『絵本・ことばのよろこび』を読んでわかった。

繰り返し、松居氏は言う。語ること、読んで聞かせることの重要性、絵本は読ませようとしたり、教えようとするものではなく、ただ楽しむもの。絵本で喜びを感じた子どもは、その体験を心の奥深く、無意識の領域に取り込む。見えないところで生きていく力になることを、確信を持って語っている。

I, II, IIIと話が進むにつれ、絵本にはすごい力があるのだということがわかる。絵本の世界は、国境も時間も常識も軽々と飛び越えて、自由である。しかしその反面、全体主義的な教育観を植え込む恐ろしいものにもなるのだと語っている。戦後、＜国の将来は子どもの教育にかかっているという思いと、まず読むべき本が欲しいという切なる願い＞のもと、＜質の高い絵本を日本の子どもたちのためにも、自分の手で編集したい＞と、「こどものとも」を発行した、とのこと。

私の絶妙なタイミングは、続いた。ちょうどこの本を読み始めた頃、娘にたくさん絵本を譲ってもらっていた。昔、その方の娘さんに読んで聞かせたという絵本と、月刊予約絵本「こどものとも」1970年代発行のものである。今、一冊ずつ、楽しみながら読み聞かせている。そして絵本の中には、レオ・レオーニの『フレデリック』もあった。読んだことのなかった私は、すぐに読むことができ、そして、その勢いで図書館の『スイミー』を借り、再度読んだ。絵本の世界の本当の豊かさに気がついていなかったことをつくづく感じた。そしてふり返ってみた。幼い頃、私はどんな絵本を読んできたのか。記憶はほとんどない。覚えているのは、馬場のぼる『11ぴきのねこ』。今も手元にずっとあるのは、ホフマン『ねむりひめ』。これは絵が好きだった(特に最後のページの大きなウェディングケーキを眺めるのが。今は娘に読んで聞かせている)。一見、子ども向けでないような絵をなぜ母が買い与えたのかはわからないが、この本も松居氏が手がけた本だった。

そして1927年創刊の「キンダーブック」は、今、娘が幼稚園から毎月持って帰ってきている。

＜語り、そして聞く関係におけることばの働きと、ことばの力を共に体験することが、単に子どもの成長だけでなく、親の成長により一層大きな力となる＞。

＜絵本を読んでやることは、絵本という喜びに満ちたことばの世界を、おとなが子どもと手をつないで旅をすることです＞。

私は今、その真っ直中、その恩恵を日々受けている。

◆【 YA 】

生後6・7ヶ月ぐらいと記憶しているが、確か「うさこちゃん」シリーズの絵本で、何回も読んできると、原色の鮮やかな赤色のページにくると、手を出して来て触ろうとする仕種をして驚いたことがある。又馬場のぼるの『11ぴきのねことあほうどり』では何回目でも、そのページに来るとのけぞって笑いころげていた姿を思い出す。親は読むだけでいい、何も言わなくても子どもなりに反応をしている。絵本は本当にうまく構成が出来ていると思う。絵の色具合や形から、子どもなりの感性で何かと思い、自分のなかに上手にとり込んでいるのかしらと思う。

少し大きくなり、人のことばが少しでも理解出来るようになると、もう絵からもことばからも二刀流で絵本から喜びや悲しみや楽しさを心で感じ、未知の世界を広げてゆくことにつながる。

ことばが全然無い絵本を見たことがある。ページ毎に切り抜いているところがあり、ページを進めると前ページの動物の顔がピッタリとその切り抜きに現われる。子どもは大喜びするだろうなと思う。

著者が述べているように、絵本から教訓や教育的なことを求めるべきではないと。親が子どもに読み聞かせるだけで十分だと。親子でくっついて本を読んでいる姿は、見ただけで微笑ましく落ち着く。

又著者は子どもは「ことばは覚えるのではなく食べるのだ」と表現されている。それを心の中で吟味し、やがて血となり肉となると。大人でも言葉が響かないとすぐ忘れる。

著者自身が福音館書店創業に関わり、子どもの時代に本と接することの大切さを自身の経験や人生から強く感じておられるのであろう。

何度も聖書の抜粋が出ていた。少しの期間かじった程度で仲々とっつきにくい。考えてみると、世界中のキリスト教信者のバイブルであるから聖書は特別な読みものに違いない。

著者にとってキリスト教、聖書がどんなに受けとられて影響されたかはよく分からない。

◆【 TK 】

テレビは気配である 若い人の語った言葉ですが、今テレビを聴いて見て、スマホで喋りまくる、メールで絵文字。

この本を読んでいかに気持ちと言葉、生活の力が大切かがよく分かりました。言葉の森に親子で楽しんで遊びに行きましょう!子供を教えるのではなく楽しむのです。そして声を出して読むと心に頭に自然と入ってくるのです。

そして、よく聞く事で精神をも充実させるのです。

絵本は言葉を通して気持ちと文化を伝える事が基本だと松居さんは言います。確かに、感情とか共感、人への気持ちが豊かになり、また文化も広げていける。色々な生活の人がいて色々な考えの人がいる。そして自分の生きる活力にもなるのです。

文字の読めない2歳迄の子供へは特にそう言えます。2歳迄に大人の脳の4分の3迄ができると言われます。心に入れておけば、その後思い出して表現できるようになるというからには、読んでさしあげたい。

ボランティアをされてる方は偉大だと思います。宮沢賢治、花子とアン、渋沢栄一と今迄読んだことや時代もつながって来ています。大人の絵本の会も企画したくなってしまう。

まず言葉と文化を大切に伝えていきたい。

◆【 R子 】

◎私にとって松居直さんとは？

「絵本の神様」と思っています。

松居さんは、福音館書店の創業に尽力し、「こどものとも」を創刊された。河合隼雄、柳田邦男、松居直さんの対談『絵本の力』の中でも松居さんの幼い頃の環境が描かれています。それがいかに大切なことなのかを知ることが出来ました。

「心を動かすよろこびこそが、生きる力となり子どもの成長、発達をうながす」

「子どもは言葉を覚えるのではなく、食べるのだ」ということが『絵本・ことばのよろこび』を読

んで納得できます。

松居直さんは、絵本の“絵”をととても大切にされています。私は日本の昔話『ももたろう』『だいくとおにろく』『こぶじいさま』など、絵を見ただけでお話が進んでいくものが好きです。民話を掘り起こし、ていねいな言葉や絵によって編集された絵本は松居直さんの絵本に対する強い使命感すら感じます。

◎私にとって松居直さんとは

「ことばの神様」

私の先輩教諭に、子どもが発したひとつひとつの言葉をとても大切に扱われている方がおられました。その方は、子どもが驚いた言葉や不思議に思った時に出た言葉を“つぶやき”として集められ、その言葉が発せられた場面を一枚の絵にして学級全体に共有できるような保育をされていました。地道なとりくみでしたが、私は一人ひとりの子どもを大切にされている先生に憧れ、自分も“つぶやき”が集められるよう聴く耳をつけなければと思ったものでした。後になって聴く力とは相手に寄り添って聞くということもわかりました。松居直さんが編集された絵本にはそんなことが詰まっていると思い、松居さんと先輩の先生が重なって見えました。

◎私にとって絵本とは

『何だろう??』と自問自答。いつも部屋のどこかに置いてすぐに手にとって見るもの。近所の子ども達に来て、絵本を見ながら目を輝かせたら「一緒に見る?」と言ってしまい、次第にお母さん達と絵本談義をしてしまう。68歳になっても、こんな思いが続いているのは、30代の頃吉川五百枝先生にお会いし、絵本のもつ魅力、絵本を読み語る楽しさを教えていただいたからだと思っています。今では子ども同士のブックトークは当たり前のように行われていますが、当時の私は“目からうろこ”状態でした。毎日、絵本の読み語りをしているうちに、子ども同士で「この絵本〇〇のところすごいんよ」と絵本の内容について共有しあうようになり、毎日の貸し出しが始まったものです。読み語りをする大人が心から「絵本が好き」と思うことが、子ども達(我が子を含めて)に伝わり、その輪が大きく広がっていくんだと感動したものです。

◆【 N2 】

我が子が幼かった頃に読み聞かせようと選んだ絵本の中に、なぜか福音館書店の本が多かったような気がします。

本書で語られているように、子どもの時の豊かな絵本体験や読書体験は生きていく時の力になることは間違いないと思います。絵本を何度でも繰り返し読み聞かせるのは、滋養のある食べ物を毎日食べさせるのと同じで、今すぐに成長の結果が出るものではありませんが、後に血となり肉となり子どもは育っていくのでしょ。

著者の言葉に「子どもは言葉を覚えるのではなく、食べるのだ」とありますが、私が子どもに本を読み聞かせているときに感じたのが、子どもは本を読んでもらいそれを耳で聞くのではなく身体全体で聞いているようだということでした。

作中「子どもの本が、国家の政策に迎合するときの影響の大きさと効果は計り知れぬものがあります。日本の絵本がヨーロッパのような本としての絵本として育たなかったのは、子どもに何かを教え込むことが絵本の役割であり、偏った教育性、教訓性が重視されたためだと考えられます。そしてその根底には、子どもの自主性を尊重し、子どもの人格を認めるのではなく、型にはめた教育を目指す封建的な考え方と、国家目的のために子どもを教育するという、全体主義的な教育観、子供観があったことは否定できません。わたくしはそういう教育を十九年間、実際に受けて育った人間です。それを批判し通すところに戦後の私の人生はあり、わたくしの仕事のすべてがあるのです。」と著者は書いています。確かに三才までの食味経験が一生を支配するという言葉があるように、乳幼児期の絵本体験が自覚せずともその後の生活に大きく影響すると思います。

言葉を聞く喜びの意味がいかに大きいか、親と子がことばの力を共に体験することは子どもの成長だけでなく、親の成長にもより一層大きな力となります。子どもを育てるという意識は多くの場合、子どもの育ち、子どもが本来持っている育つ力を妨げているのではないかと著者は綴っています。子ども達の育ちについて大切なのは耳からのことばの豊かな体験の積み重ねである、という事はつまり子どもには楽しく本を読み聞かせ、耳からのことばの喜びと楽しみの体験を与えるだけで十分であると言うことに尽きるのでしょうか。

しかし私は、子どもは絵本を読んでもらった時に耳だけからことばの喜びを知るのではなく、その時の読み手の雰囲気などからからだ全部でことばの喜びを知るのだと思います。本書を読んで、絵本は子どもだけのものではなく、大人も十分楽しめ心の栄養にもなると再認識しました。この本にも沢山の本が紹介されていますのでもう一度読んでみたいと思います。

◆【 F 】

初めて「読まず嫌い」をしました。
食わず嫌いのように、ろくに手にとりもしないで読むのを止めてしまったわけです。
「難しくて読めなかった」わけでも「生活が忙しくて時間がなかった」わけでも「ちょっと読んだけど、つまらなくて読む気がなくなった～」わけでもありません！

読み進められなくなって、本を横へ置いているうちに、段々と自分の中で本に対する勝手なイメージが膨らんでいって、読まずに反芻ばかりを繰り返しているうちに理解した気になってしまったのです。何もないところで喉を動かして空気ばかりを吸っているとゲップが出ます。吐き出させて下さい。

皆さんはお気づきになられたでしょうか？

この本の作者は、わかり易く言ってしまえばエリートです。

大学を卒業してすぐに働いた会社で役員を務め、編集側であるにもかかわらず絵本を創り受賞までして、3つの大学で講師を、国際的な団体でも役職を任されているすごい人なんです(うらやましい!!!)。

聖書を理解し自分で得た教訓と同じように使いこなし、いろんな国へ時には家族とともに出かけ、絵本の知識も豊富で、時代(業界)に対する情熱もすごい！対して自分は…となると歩んできた人生に隔たりを感じてしまいます。

本を通じて、コミュニケーションを図ろうとすること。顔の見えない、そして一方通行の、膨大な情報の受信ですから、それを全て受け取って自分のモノであったかのように取り込み、時には自分の方を変えてしまうことは読書で得られる効能を考えると本末転倒ではないでしょうか。本は薬にも、毒にもなり得ます。著者の主張が自分の思っていることと近くても、相手は別の人間だということを意識して距離を置いて読む姿勢が必要だ、と思います。

我が子には絵本を読んであげたい。168ページに書かれていましたが多くの人が価値観としては共有しているのでしょうか、自分もそう思います。

著者は、子供に何かを教えたり、分からせたりするために読んでやるのではなく一緒に絵本が持っている楽しみを分かち合っ欲しいといっています。

《(大人が子供に戻るとき(178頁))》で書かれているように絵本をお芝居の台本のようにして、一家で楽しく演(よ)めたら、それはきっとすごく楽しいに違いありません。

このような読み方(絵本に向き合う姿勢)があるのだと、知識として学べると、たとえ実践する機会がなかったとしても自分が読者としてスキルアップできたと感じます。

つまりやっぱり絵本を読むことは素晴らしいことなのだ！と早合点したり、わたしは絵本を通して子供に教えるような姿勢(こと)をしたことがない(それが、絵本を読み込むこと、絵本の芸術的な技巧に注目したり作者の背景まで気にかけて調べることができなかった、そんな自分に気づかず)ああ！！わたしの読み方は間違っていなかったのだ！！と作者と同化したように満足するのは、本書に対する理解としてジュー分のいくらか？

消費する読み方は時間の空費と等しいでしょう。しかし未だ自分は絵本を、著者のように読み解くことをしたことはありません。

それにそもそも、そのような背景が気になっても調べるやり方が、見当もつかないので、偉くなりようがないのです。あわれあわれ、あわれやなあ。

「ああ。人の口を借りて好き勝手を言わせてもらったので、最後は少し真面目に考えたことを皆様に問いかけて締めとしたいと思います。」

本書は、1995年6月に出版されました。

終戦後物質的豊かさを求め平和な世の中をみんなが作り上げた昭和は終わり、カルト教団

によるテロと大震災によって世紀末が印象付けられた(であろう)年やがて来る新世紀の社会は、そして人間はどこに向かおうとしているのか。多くの人が関心を寄せていたのではないのでしょうか。

当時を知らない平成初期生まれの自分からしても、昨今は、真実味よりも話題性が上位にくるスマホ・SNS 優勢時代のように思われます。

190ページに読者層の話が出てきました。

良い本を作るだけでは駄目で、本を読んでもくれる読者を獲得しなければ出版業を続けていくことはできないという話です。業界の未来、出版人としての想いが語られ国際交流の話も出てくる第Ⅲ章、少し政治色も帯びてるように感じます。宗教や政治は人の好みが大きく表れるものです。今の時代、相手の性格と主張の良し悪しを分けずに自分の好き嫌いで即決する人も少なくないと感じます、本書は今も本当に効能が必要な人の耳に届く、いや目に入るのでしょうか？

2021年5月

課題本 『鬼の橋』

伊藤 遊/著 福音館書店 1998年

読書会を終えて

講師 吉川五百枝

〈「非天丸は泣いていたの。よだれを流しながら、涙も流していたわ。あたしを食べたい気もちと必死で闘っているのがわかった。あたし、かわいそうで、かわいそうで..」〉

1998年が出版年なので、もう20年以上前の記憶になるが、『鬼の橋』と聞くと、この阿子那のことが鮮明に甦る。鬼の非天丸が、人間の女の子阿子那の傍に居たいと切実に願う故に、鬼の自性である人食いの内なる欲望に打ち勝とうと苦しむ姿である。

作品に登場する人物が、小野篁、彼の父岑守、それに坂上田村麻呂という実在の人物であるし、特に、小野篁は、東広島市河内町入野生まれだという伝説もあって、随分身近に感じる。ご近所さんなのだ。「篁」と名前が付いたグループや機関紙もある。それに加えて、京都の東山には、一条天皇の中宮定子の陵墓もあってこの近辺が懐かしい。

小野篁が、昼間は都の宮廷で働き、夜は冥府の役人だった話も、『江談抄』や『今昔物語』などの記述から有名な話である。京都の地下には魍魎魍魎の徘徊する冥府があって、東山珍皇寺の井戸から出入りできると教えられた時は、ワクワクして楽しかった。現代では、魍魎魍魎がウロウロしているのは地上か地下か。

今回は何度目かの読みなので、筋の展開の代わりに、小さな渦巻きを探してみた。

渦の中心に据えたのは「橋」であった。小説の中に文字として描写されるのは、「鴨川にかかる五条橋」と、「冥界の河にかかる橋」だけである。しかし、「橋」というイメージは、それだけではない。

「橋」を意識するのは、2つのものが向かい合い、結ぶ必要が生じたときだ。大昔、深い谷に大樹がまたがって倒れ、その上を通れば知らない向う側に行けることを知ったご先祖様方は、さぞうれしかっただろう。川や海を挟んだ二つの地点を結んだり、鉄路や道路を跨いで越したり、いずれにしても、それらの間には越さねばならない隔りがある。

それは地勢的であるとは限らない。人と人の中にもある。人間はそれぞれが唯一の存在で、いかに愛しても相手にはなれないからだ。一人の人の中に二点を抱えている事も多い。

鬼と人間の間＝人間は、手に負えない災難や、己の敵、憎しみ、足下の身に巣くう邪悪な心など不都合な事物を、自分の守備範囲から追い出して、身の外に置き「鬼」と名付けて形を造った。だから、その「鬼」との間に、人間の方から友好の橋を架けることはない。だが、「鬼」の方は、時々忘れずに橋を造ってやってきて、人間に「鬼」を思い出させる。人間も、怒

りや不安で我を忘れて、「鬼」の造った橋を渡り、自分たちで造ったはずの「鬼」そっくりになる時が度々ある。ヒューマニズムは、仁王様足下の天の邪鬼よろしく、「鬼」が支えているのかもしれない。

篁と鬼の間＝少年篁のであう鬼は、非天丸以外、どの鬼も自分を危うくするものである。その存在は許せない。しかし、あるとき、篁の母は、比右子も鬼だったという。過失で比右子を死なせたと悔いを持つ篁は、人に鬼を見る母を知る。鬼と無関係の人間などいないのだ。鬼との間にかかる橋は、罪の意識に沈み込んだ篁に、そのまま抱えて歩いて行けば良いのだと励ますようだ。

少年の篁と元服した篁の間＝子ども時代から、大人になるのは、決心のいる事だ。そのため、多くの民族や時代に、けじめを付ける儀式が用意される。篁にとっての加冠は、異腹の妹比右子への罪の意識と複雑な慕情とを、胸の中で整理することであった。自分の感情ではなく、周りの人々の思いも引き受けなければならなくなるのが大人になるということ。成長と呼ばれる橋は、橋脚に、少年時代の後悔を隠し持っている。

篁と父の間＝宮中のしがらみを長年泳いできた父に対して、まだ力の無い少年篁。父と子の間には、大きな壁がある。それを越える橋を協同で造るには、痛みを伴う和解が必要だ。陸奥へ赴任する父に同道する篁は、異腹の妹をもたらした父に、わだかまりを持っている。その父に比右子を慈しんでくれたと感謝され、父の相棒となることを受け入れる。父と子は、陸奥で共に新しい人々と新しい橋を造ろうとするのだ。お互いの弱さを知りながら、新しいものを二人で見る事によって、父と子の間にも橋が架かる。

篁と比右子の間＝小野家の嫡男である篁。突然現れた 2 才年下の異腹の妹比右子。二人の間にかかけられようとした橋は、比右子の事故死によって未完となった。禁止された地に連れだし、見失って死なせてしまった篁には、二人の間で架橋途中であった様々な思い出が、苦しく大きな痕跡として残った。

篁と阿子那の間＝妹比右子の事故死の責任を心に刻む篁に、なんの屈託もなく振る舞う女の子阿子那。篁が、人を食う鬼非天丸から少女を護ろうとするも、篁の心の容量では及ばない。二人の間の橋は、阿子那によって護られているようだ。

篁と非天丸の間＝冥土からやっと逃げ出した篁が、冥土から来た非天丸を快く思うはずもない。2 人の間には、結ばれる橋はあり得なかったのに、阿子那が縁となってお互いがきがかかりな存在となった。片ツノをもがれた非天丸と、自分も片ツノをもがれた鬼であったと自覚した篁の間に、いたわりの共感が生まれる。憎む心を土台石に沈めて、二人の間にかかけられた橋は、非天丸の賞賛に答えて強くなりたい篁を育て、非天丸からは、人食いの鬼の習性を取り除いた。願いや希望を育てながら橋がだんだん頑丈になっていく。

阿子那と非天丸の間＝食われる人間と食う鬼の間に橋が架かるのか。本来、その間柄は断絶しておくことで人間の平安が保たれる。だが、鬼の非天丸が人間の阿子那を大切な存在と感じたときから非天丸の煩悶が生まれた。鬼はツノを持っていてはこの世に居られない。だが、阿子那は、ツノがあるままで良いと言う。「助けてください、仏さま。」橋が架かる。

この世とあの世の間＝篁は、この世とあの世を行き来したと伝えられる。あの世は 2 つあるようだ。1 つは、地獄、もう 1 つは浄土。篁には、地獄への橋は想像できているが、浄土は想

像できないらしい。非天丸が言う。「橋は...あると思えばある。無いと思えば無い」。阿子那も非天丸も浄土があると思っている。だが、浄土には橋は要らない。他の命をとることで生きる鬼の非天丸の涎を流し涙を流す姿が、そのまま浄土に直結する。

1000年の時を繋ぐ見えない「橋」が、鬼と人間を一塊に溶かして、又、明日に繋ぐ。

～読書会の余韻の中で～ 「三行感想」

◆【 YA 】

著者伊藤 遊の作品を初めて読む。小説の面白味が凝縮されたような作品でとても楽しく読んだ。実在の人物等が登場し、又おとぎ話の鬼たちも登場。話の始め頃からはディズニーの「美女と野獣」を思い出し、半ば頃終りにかけては、葉室麟や藤沢周平の小説を彷彿とさせるようなホロりとくる場面が多々あり、改めて小野篁という平安期を生きた奇行で知られた人に少し興味が沸いた。家族で出向いた陸奥、戦で土地も人の心も荒れてしまった陸奥に学問所も必要と説く父岑守の言葉に一体どのようにこたえ、成長していったのだろう。

◆【 KT 】

平安初期に実在した小野篁の少年時代の成長を書いたファンタジー。百人一首の参議篁と小野篁が結びついていなかった。ルビが多く、読みやすく面白かった。阿子那と非天丸の関係にホロリ。鬼とは？橋とは？よくわからない。皆のいろいろな考えが聞けたのもよかったが、入野の竹林寺の『おののたかむらものがたり』の紙芝居が一番良かった。

◆【 T 】

親に黙って妹の比右子を荒れ寺に連れ出し隠れ鬼をして遊び、妹が井戸に落ちたことに気づかずそのまま帰ってきたしまった篁。

比右子が死んで悔恨に苛まれ、このさき生きる自分を思い描くことができず抜け殻のようになってしまったが、橋の下で暮らす阿子那や阿子那を助ける非天丸、冥界の征夷大將軍坂上田村麻呂達に出会い話をしたり、共に過ごしたりするうちに徐々に成長し、もっと強くなりたいと願うようになり生きる力を取り戻していく。

父親の小野岑守が陸奥守になり東北へ旅立たなければいけなくなったとき、父親の不安やさみしさに気づき寄り添うと共に、家族のためにどうすべきか考えられるまでに成長した。篁の葛藤や成長・阿子那と非天丸の悲しみと二人の絆……いい本に出会えたなと思った。

◆【 K子 】

とても面白い小説です。ファンタジーものです。挿絵もあり、何故か郷愁を感じました。読み易くもありました。

主人公の小野篁は実在の人物です。小野と聞けば…「妹子」「小町」も縁につながる人達です。「竹林寺」とも深い繋がりがあるそうです。ストーリーは簡単ですが……なかなか奥深いものがあります。掘り下げると突き当たる事の多々。鬼の存在については自分の内に住んでいるもの。他人によってもたらされる鬼(これの退治の方が大変なことが多いと思います。)

橋の存在・渡れるもの・渡れないもの・渡ってはいけないもの・流されるもの・それぞれが背負っているもの

一回目さらっと！二回目待てよ！三回目自問自答！読後感 手強さ満杯!!!

『鬼の橋』を読んで

◆【 TK 】

先月に続いて福音館の児童文学だった。男の子が、喜び共感しそうな物語である。人物の出てくる当時は疫病争い災害が多く、死体が川に捨てられて沢山浮いていたので、まるで地獄のようだったろう。それが背景になっている。でも今と変わらないとも言える。

橋と川はあの世とのつなぎ目

人間と鬼との堺

人間は、死、善悪、永遠という課題に常に向き合っている。特に、善悪は神様にしか決められないもので、人間は何年一生生きても磁石を持たずどこかをめざしてさまよい続けてしまっているような気がしてしまう。人の不完全さは目につくが自分の罪はわからないところもある。堂々巡りで短い人生を歩んでいる。どうしても人は死んでいき、どうしても罪を犯してしまう。そんな人間を神は憐れんでいると思う。

鬼が一生懸命人間になろうとしている、そしてそれを応援している女の子が優しい。鬼も、角を触られたら痛くて力が弱くなっていく自分にも気づいている。

人間の弱さを気づいて人を責めるのではなく人を励ましてあげる事を感じた。

◆【 N2 】

小野篁については百人一首の和歌と、夜毎地獄へ行き閻魔様の手伝いをしていたという伝説を知るだけで、彼の子供時代については何の知識もありませんでした。その篁の子供時代を舞台にしたファンタジーでとても面白く読みました。

子供心のちょっとした意地悪と不注意で異母妹の比右子を亡くし、導かれるように比右子の落ちた井戸に吸い込まれ、人食い鬼達に追いかけられるなか比右子が渡った冥界への橋を渡りかけたところで坂上田村麻呂に出会い、この世に送り返されてしまいます。

大水の出た日に五条橋の東からやって来た非天丸は、流れ来る大木から父の作った橋を守ってほしいと嘆願する阿子那の身の上話を聞き、はじめて流す自分の涙に驚くのでした。

橋が無くなる事をひどく恐れる非天丸、笑った自分に驚く非天丸。鬼の身にはそれらの感情

は無かったのでしょうか。だから鬼なのでしょうか。

五条橋を渡り終えたあと、阿子那と非天丸はそれぞれの弱いところ足りないところを補い合いながら暮らすうちに、非天丸は徐々に人間の感情を取り戻していきます。篁は阿子那が非天丸に食われないように守ろうと必死なのですが、比右子は非天丸の優しさを見抜き、彼を信じて彼が鬼の習性を表すことには目を瞑っています。

非天丸も昔は人だったはずですが、いつどうして鬼となるべくその橋を渡ってしまったのでしょうか。悲しみ、怒り、恨み、妬み、深すぎる愛情によって人はたやすく鬼に変じるのでしょうか。

坂上田村麻呂が戦功にも関わらず死して尚都を守る任務から放たれずあの世へ旅立てなかったのは、蝦夷を制圧する時に鬼のようだったからなのでしょう。

肉食の非天丸は、阿子那の寝姿によだれを垂らしながら涙を流しながら見守っています。本能と理性と愛情の間で葛藤し、苦悩する非天丸。そしてその非天丸の姿に気づかないふりをする阿子那。この非天丸と阿子那の姿には胸が熱くなりました。

橋を渡って鬼の世に行くか、橋を渡って人の世に行くかは自分の心が決めるのです。

◆【 F 】

スラスラと一気に読みできた。話の筋も分かりやすく、分厚い本に初めて挑戦する子供が読むのにちょうど良さそうだ。一冊読めた自信から他の本も読んでみたいと気持ちになるのではないだろうか、読書好きへの第一歩だ。

1997年、児童文学ファンタジー大賞に輝いた「鬼の橋」は受賞の翌年に発行され、受賞の翌々年には読書感想文(※)の課題本に選ばれている。同じ年、竹原読書会でも課題本として取り上げられていたようだが1999年当時は、まだ読書会で感想文集が作られていなかったものでどんな感想が飛び出したのかは分からない。非常に残念だ！

※青少年読書感想文全国コンクールの第45回中学校の部のこと。

読書会で何度も取り上げられる『鬼の本』は、自分にとっての鬼とは？橋とは？を考えることによって、今の自分なりの読み方を楽しむことができる本らしい。だがそんなこと思いもせず話の筋を読んで、子ども向けだからなのか物足りないなと思って一回だけ読んで本を閉じてしまった(子供でも読めるという意味であって、本に子供向けという区分があるわけではない)。

読んだ印象として「漫画のようなもの」という感想を持った、阿子那が見事にオテンバな台詞回しをしており親しみやすいキャラクターという印象を得たことが主要因だと思う。そして漫画と比べて話の展開が味気なく感じた。

おそらく子供読者は、冥界に行くことができる特別な存在である一方、自分は恵まれた貴族の家に住んでいて橋の下で暮らす知り合いに対して距離を感じてしまう篁に対して自分を重ねて考えたり、身寄りがなくとも遅しく一人で生きている阿子那に憧れを投影したりして作

品世界を楽しむのだと思う。

しかし大人になって、自分が自分でしかないことに気づいてしまった自分はかつてのように自分を投影して物語世界を自由に楽しむことはできず、逆に橋の下で暮らす十歳そこいらの孤児の描かれていない不幸と現実の暮らしについて余計な心配をしたりした(これは作者の意図から外れる読み方だろうが読者は意図的に描かれていない部分を見つめる姿勢も大事だと思う)。

◆【 MM 】

妹を想う兄の気持ち、子供を思う親の気持ち、自分に近い人を大切に思う気持ち、それぞれを考えて今の自分を少し離れて俯瞰して見ている気分を味わった。

自分の悪戯心から大切な妹を亡くしてしまった篁。その悲しみと後悔から後を追おうと橋を渡ろうとする篁に放った將軍の言葉に泣いた。「忘れなくていい。忘れずに、かかえて生きてゆけ」。忘れなくていいこと…これは悲しみにも怒りにも当てはまる気がする。そう感じていることを自分で認める、そしてそれを受け止める。それを否定するとストレスもたまるし周りが見えなくなってしまう。私になりたい大人たちはこれが自然とできている人だ。自分を許せるひとは人も許せる。自分を受け入れる人は人も受け入れられる。認められる。

作者の伊藤遊は絵本で最初に知った。今回の『鬼の橋』を読むと、丁寧な状況の描写と心の動きの表現がとてもうまいと思った。だから読んでいてもしらけることなく本の世界へ入っていける。鬼と人間がすんなり生活に溶け込んでいる。私が出会った伊藤遊の絵本は鬼ではなく狐が描かれているのだが、見えない物が見えることがある、ああ本当にそんなことがあるかもしれないなあ、あるといいなあと思えて心があたたかくなったのを思い出した。ないものがあるということ、そういう想像力を働かせることができるといういろいろなことも受け止められる気がする。

私はファンタジーが苦手だと話したことがあると思う。でもそれは大人になってからのことで思い返してみれば子供の頃はファンタジーとかなど考えもせずに読書を楽しんでいた。どこで苦手になっちゃったのかしら……。でも好きな作家はずっといてその人たちが書く物語を楽しんでいたのだからファンタジーが苦手といつのまにか自分で決めつけていたのかもしれない。自分ひとりだけの読書活動なら好きなものだけを読んでいればいいので幅が広がることは滅多にない。しかし読書会に参加することで、いつもなら手に出さない世界の本を読まなければいけない、それが新しい考え方を自分にもたらす。人の感想を聞くことで新しい考え方に触れることができる。その新しい刺激が自分を広げていってくれているのだなあ今回の読書会に参加して感じた。だって『鬼の橋』から鬼について考えますか？そして鬼って自分の中にいると考えられますか？！でも不思議とそれがすんなり「そうそう、鬼って自分の中にいるのよ」と言ってしまう参加者が愛おしいです。その感覚を自然に身につけている皆さんと交流できることがありがたいことだと思います。

◆【 MS 】

1 愉しくて しらべてみました

(1) 著者「伊藤 遊」は？

著者「伊藤 遊」と出会ったのは、およそ10年前だったでしょうか。絵本『きつね、きつね、きつねがおる』を読んだ時です。子供にだけ見える狐火の話。見えない世界を筆の力で見えるようにした作品で、彼女の世界観に魅了されました。

京都と言えば「魍魎魍魎」をイメージします。京都の魅力の一つだとも思っています。もしも京都に生まれ、寝物語にお婆さんから京都の昔話を聞きながら育ったら、どんな興味深い話を想像し、話を創られることでしょうか。それが、「伊藤 遊」だったのです。

彼女は結婚し、子供が幼稚園に入って時間に余裕ができた時、お金のかからない愉しみを探して、文章を書くことを始められたそうです。すると一気に300枚。それが『なるかみ』。第2回児童文学ファンタジー大賞に応募すると、最後まで残り佳作賞。すると選考審査長だった河合隼雄さんから直接はげましの電話をいただいたとか。次の年プレッシャーの中、書いたのが『鬼の橋』。すると見事大賞を受賞。福音館取締役の斎藤敦夫さんから直接出版の依頼を受けたそうです。

多筆な作家ではないようですが、出版すると様々な賞を受賞。『えんの松原』は、宮中に仕える少年と東宮が、東宮に祟る怨霊を探します。『ユウキ』は、転校生の名前がみなユウキです。『つくも神』は、蔵の中で古い道具に魂が乗り付きます。『狛犬の佐助』は、親方に造られた狛犬と最後の弟子に造られた狛犬が話を始めます。

伊藤 遊の作品は、登場人物のとらえ方が温かく深いので読み終わるとほっこりします。

(2) 作品の時代背景は？

時代は平安時代初期。桓武天皇が長岡京遷都からたった10年で平安京遷都を行い、京都は新しい都としてできたばかりでした。遷都の理由に驚きます。桓武天皇の腹心藤原種継が暗殺されるという事件が起きました。すると、実弟早良(さわら)親王の仕業ではないかと噂が立ち、桓武天皇はここぞとばかり早良親王に嫌疑をかけ、皇太子の地位を剥奪し幽閉した。親王は無実を訴えて十日余り絶食し、壮絶な最期を遂げたのです。すると3年の間に桓武天皇は実母親と四人の妻を亡くしました。桓武天皇は怨霊の凄まじさに戦慄を覚え、遷都を決行したそうです。

桓武天皇は、血のつながった弟を蹴落としてでも、我が息子(安殿)に天皇を譲ったのですが、譲られた平城天皇は3年間病床に着き、3年で次息子(賀美能)嵯峨天皇に攘夷したのです。このように、政(まつりごと)をする人達は権力闘争に明け暮れ、怨霊に苛まされました。

民衆は干ばつによる慢性的な飢えや、天然痘による疫病、大地震などの天災、坂上田村麻呂等による蝦夷(えみし)東北遠征による財政難などによって、その日の命も危うい悲惨さだったようです。

地域としては、五条橋の向こうは 葬送の地として知られる鳥辺野(とりべの)。六道珍皇寺の井戸は冥土への入口と言われ、嵯峨の福正寺が出口と言われたそうです。小野篁は遠流先の隠岐島から京都に帰ってから、夜ごと都を散策するので、上記の入口出口を使ったと噂され、昼間は朝廷で官吏を、夜間は冥府において閻魔大王のもとで裁判の補佐をしていた

という伝説がある。

(3) 主人公小野篁は？

〈主人公小野篁は、平安初期に実在した人物です。漢詩文にすぐれ、有能な官僚として四代の帝に仕えました。彼の豊かな才能は、唐の詩人、白樂天になぞらえられ、さまざまな史料の中で讃えられています。

篁には「野狂」という呼び名がありましたが、それは、常識にとらわれず、簡単には妥協しない人柄であったことを示しているようです。遣唐副使に選ばれ、3度目の出航の際、壊れた船に乗せようとした上役に抗議して、乗船を拒否するという事件を起こしました。怒った嵯峨上皇は、篁を隠岐島へ流してしまいました。このときに彼が詠んだのが、百人一首にもある

わたの原^{はら} 八十島^{やそしま}かけて 漕^こぎ出^いでぬと 人^{ひと}には告^つげよ 海^{あま}人の釣舟 (参議篁)

という歌です。〉

【あとがきより 一部引用】

また、逸話や伝説の多い人で、河内町入野にある「竹林寺」にも篁の伝説がありました。講師の吉川先生が、河内町入野の会で作成された紙芝居『おののたかむらものがたり』を朗読してくださいました。

2 感じたことは…

『鬼の橋』を読み、読書会を終えて感じたことは、「鬼」と「人」にはどんな違いがあり、「鬼の橋」はあるのかという問いでした。

「鬼」の非天丸は、〈おれだって、たぶん昔は人だったはずだ。人が鬼になるのなら、鬼だって人になれる〉と言います。非天丸はきっと身の上に不幸が襲いかかり、苦しみや哀しみに悩み、悔しくてたまらず憎しみを爆発させたのでしょうか(作中には具体的には描かれていません)。自分で荒れる気持ちをどうにも制御できなくなり、「鬼への橋」を渡り、鬼になったのかもしれない。それで冥界への橋の袂で暴れるようになったのです。ところが、死後も都の守護神として葬られた田村麻呂に片方のツノをとられたことで、力や力の源でもあった憎む心も一緒になくなり、手に入れたものは知恵と情けであるらしかったのです。非天丸は、命懸けで大洪水から阿子那の亡き父が造ったという五条の橋を守ろうとし、非天丸に食われる恐怖の中でさえ自分を信じる阿子那を前に、本能と愛情の狭間で葛藤し苦悩します。まるで修行のような日々を過ごしますが、信じることの尊さを学び、鬼から再び人になろうとしています。その意味では非天丸にとって「鬼の橋」は、「鬼への橋」であり、再び人になるために渡った「鬼からの橋」なのです。

一方、「人」である坂上田村麻呂も、戦(生死)の場面では己が生きたために多くの敵を殺し、見方からすると英雄だが、相手側から見ると我が命・家族の命・仲間の命を奪う「鬼」そのものなのです。相手側にどれだけ多くの憎しみ苦しみ哀しみ悔しさを与えたことでしょうか。

そう考えると、「鬼」と「人」にどんな違いがあるのでしょうか。というか、違いつてあるのでしょうか。「人」も「鬼」も、一人の中に「一緒くた」に居て分けられないのではないのでしょうか。

さらに、非天丸は「冥界の橋は幻の橋だ。あると思えばあるが、ないと思えばない」と言い

ます。「鬼の橋」は、人が四苦八苦の縁にふれて鬼になってしまい、瞬時に渡る橋であるとともに、一旦「鬼」になったならば、知恵と情けで精進すれば渡れる橋と言えるのではないかと思ひ至りました。言い換えれば、『鬼の橋』は、私たち、人の心の内に在り、あると思えばあるが、ないと思えばないと言えるのではないのでしょうか。

ちなみに私の心の内に在る鬼は、神出鬼没盛りです。

2021年6月

課題本『蓮如 われ深き淵より』

五木寛之/著 中央公論社 1996年

新型コロナウイルス感染症に係る「緊急事態宣言」が延長されたため、開催できませんでした。

2021年7月

課題本『渦 妹背山婦女庭訓 魂結び』

大島真寿美/著 文藝春秋 2019年

読書会を終えて

講師 吉川五百枝

『渦』という文字よりも、『妹背山婦女庭訓 魂結び』と言う文字をすらすらと読んで、笑いがこみ上げてきました。

江戸期の文芸として出てくる『伽羅先代萩(めいぼくせんはいはぎ)』や『傾城△△△』(けいせい△△△)『神明恵和合取組』(かみのめぐみわごうのとrikumi)などの漢字で書かれた作品名をずらりと並べ、小手調べだとその読み方をテストされた昔の記憶があるのです。さっぱり読めません。みんなの珍妙な読みで、大笑いが続きました。

おかげで、以来このでの文字を見ると、懐かしい人に会ったような気になります。

とはいうものの、今回の作品は、馴染みの薄い浄瑠璃や歌舞伎の世界のことで、読み終わって眺めてみると、近松半二という浄瑠璃の詞章作者の一代記でした。

文章は、セリフの量が多く、それが関西弁です。平仮名を丁寧に読む必要があり、聞き覚えのあるアクセントで、自分に読み語りをするような読み方ですから、いつもより少し時間がかかりました。〈頼みによくおへんから〉など、一文字ずつ拾うような読みです。

浄瑠璃と歌舞伎の違いが、今回あらためて整理できました。

歌舞伎は何回か上演を見る機会がありましたが、人形浄瑠璃は、ほんの数回しか見たことがありません。演者の名前も、歌舞伎の方がよくわかります。それでも、浄瑠璃の演目を見ると、見知ったように感じるのは、もともと浄瑠璃の為に書かれたものでも、翻案されて、歌舞伎で演じられているからだと今回あらためて認識したことでした。

作品に込められた情も、役者が発声し身体で演じる歌舞伎と、それを三味線と共に太夫が語り、人形遣いの人形が表現するのでは、大きな違いになります。

客としてみるときの集中力は、人形を見ている時の方が小さい濃い円になっているように思いました。人の身体動作や肉体の限界を、人形は越えられるのかもしれませんが、いつでもつやつやとした美しい人形の肌は衰えることはありません。

ただし、見る側の想像力、洞察力に対する要求は、人形浄瑠璃の方が高いと思います。客が、その要求に応えるのが面倒になると、歌舞伎の方が興行収益はあげられるでしょう。浄瑠璃に比べて歌舞伎が今も華やかに続いているのは、役者の人気の内容を手助けし易いというものもあるのではないかと思います。

浄瑠璃にしても歌舞伎にしても、江戸時代の台本作者は、近松門左衛門の名をあげ、その後、鶴屋南北、河竹黙阿弥の名前を加えればそれで良いくらいの知識でした。

ところが数年前、並木宗助(宗輔)という竹本座(豊竹座に居たことも)の作者が、30 才くらいまで、三原市の臨濟宗成就寺の修行僧であったと知りました。

還俗して大阪に住んだその人は、並木千柳という名前です。今回の作品にも登場しますので、目にした途端、「あらっ、あの人」と浮き立ちました。

『菅原伝授手習鑑』や『仮名手本忠臣蔵』などを手がけたのは、三原でお坊さんだった人だと思えば、何となく近くなろうというものです。

『仮名手本中心蔵』は、浅野と吉良の争いを、時代を移して、塩谷判官の刃傷、大星由良之助の敵討ちにしてあります。吉良のモデルになった高師直は足利尊氏の家来。たどっていくと出会う人が広がります。近松半二という聞いたことはあるけれどよく知らない人が、私には並木宗輔への親しみから発して、活き活きと感じられるのですから、興味の湧きようはいいかげんなものです。

近松半二の魂のお師匠さんは、硯に想いを込めて残してくれた近松門左衛門。近松門左衛門が吹き込んだ魂は〈実にして虚にあらざ 虚にして実にあらず この間に慰みがあるものなり〉という言葉であったと思います。

『渦』は、『妹背山婦女庭訓』という作品の成り立ちを見るようなものではありませんが、虚も実も夢も現実もいっしょくたに投げ込まれ、詞章作者達の頭と腕でかき回し、道頓堀という場を得て大きな渦巻きを現出させたもの。

中心に引き込む渦巻き、中心から無限に広がっていく渦巻き。遙か遠い世界も、自分の胸の内にあるという作者の高ぶりが伝わります。生も死も、あっちもこっちも三千世界も、いっしょくたにしてしまう「物語り手」の醍醐味が、作者の大島真寿美の筆に乗り移ったようです。

最終章は、活字の字体が、柔らかく少し小ぶりの文字も出てきます。それが『妹背山婦女庭訓』の「お三輪」なのです。当時、身近にあった三角関係の噂話が、半二の耳に入っていたのかもしれませんが。ロミオとジュリエットにも譬えられる男女より、叶わぬ男に懸想した「お三輪」の登場です。〈私は三輪と申します。〉〈身体を動かす人形遣い、言葉は太夫。しかし、私の性根だけは、ここにおります、〉と語り始める操浄瑠璃の登場人物は、そこに描かれる虚の世界で、窮屈な思いをして生きている現実の女の身代わりのように振る舞います。〈婦女庭訓は、男衆の都合です。〉観客の女に代わって語る「お三輪」ですが、その最期は、嫉妬に狂う女の生き血として、戦いの道具となりはてました。それでも愛する人の手柄になったと知り、喜んで死出の旅に就くのです。

この時の「お三輪」の心情を、〈愀気はあかんと戒められつづけたおなごは、むしろ、それやからこそ、すくわれるんです。悔しい思いがお三輪ともども成仏するんです。〉と文中に書かれています。

「お三輪」の悔しさは形を変えて現実の心のどこかにあると、大島真寿美は見るのでしょうか。婦女庭訓では咎められる行為を、舞台上の虚の世界で存分に味合わせしてくれるなら、最期は殺されても、それでも見物の娘達には良いのかもしれませんが。

「仁左さま」や「海老さま」にうっとりする現世に、江戸期は密接しています。その詞章作者が、“300年ほど前に、こないなように生きて書きましたんや”と、父母家族同僚達と共に、渦から舞台に現れたような気がしました。

読書会の余韻の中で「三行感想」

◆【 YA 】

この本で浄瑠璃作者、近松半二のことを知る。

近松門左衛門に傾倒し、その生涯を浄瑠璃に生きる。展開する舞台大阪道頓堀を始め、彼をとり巻く人物、又殊に女性たち、何かリズムがあって読むのに調子の良さを感じる。

父が門左衛門から貰ったという硯を譲り受け、浄瑠璃を継ぐ使命感もあつたに違いないが、その才能を花開かせ、五十数年と言う短い半二の生涯とても面白く読んだ。

◆【 KT 】

浄瑠璃作家、近松半二の生涯。ストーリーにひかれ楽しみながら読めた。

「柝の音が聞こえた」の終りかたも気持ちよかった。

お三輪の存在についてもみんなの話を聞いて奥の深い事がわかった。

240年後のイヤホンガイドのくだりは微笑ましかつた。

◆【 N2 】

はじめて浄瑠璃作者について知りました。面白かったです。人形はン百年も生き続け、あらゆる物事をみつめています。

なんと素晴らしい、なんとおそろしい！

『渦 妹背山婦女庭訓 魂結び』を読んで

◆【 YA 】

浄瑠璃は16世紀前半に琵琶法師による語りものとして始まったとされる。次第に人々の間に人気が出る。阿国歌舞伎の出現もあり、人形浄瑠璃として成長する。

このような中、17世紀後半から18世紀前半にかけて、人形浄瑠璃を代表する作者近松門左衛門が出現し、その芸能を確固たるものにする。人形遣い、三味線伴奏、義太夫語りで人形に命を与え、高い文学性や物語性を持って人々を魅了してゆく。

人々の生活の中にも起こるであろう事柄を演じる「世話物」は人気が高かったに違いない。

今回の課題本『渦 妹背山婦女庭訓 魂結び』は近松門左衛門に傾倒し、その生涯を浄瑠璃作者として終えた近松半二の半生である。「妹背山婦女庭訓」は合作と言えども近松半二の代表作となり、1771年大阪竹本座で初演され、拍手喝采となったとある。

儒学者の父に小さい頃から連れられて通った竹本座の影響が大きく、浄瑠璃の世界に迷わず入ったきっかけとなる。小さい頃の体験、経験が人生の生き方を後押しし、成就出来たのは本当に素晴らしく美しくもある。しかし人生は順風満帆とはゆかず、苦悩する半二もいたが、彼の周りの人々の存在が光っている。妻のお佐久をはじめ、歌舞伎作者の並木正三や竹本座の人々の影や回向の助け、必ず沢山の人々の助けが必要と半二も確信している。竹本座

が大阪道頓堀にあったのも幸運かも知れない。大阪の人々の活気と人情味溢れる環境、半二の人生に勢いを与えている。

半二合作の代表作「妹背山婦女庭訓」は五段もので語られている。過去に起きた事柄を題材にした「時代物」だ。しかしどの演目も、妹山、背山という男女の愛情が入っている。真実と嘘、史実と空想等々、渾然一体となった物語は人形にも拘らず、人々は人形の中に苦悩や喜びを正に生きている人間と同じように感じたのだろう。

読書会では「お三輪」が話題になった。余りにもお三輪の語りが多過ぎると。鎌足の息子淡海と恋仲だったお三輪が恋敵の出現もあり、自分の本意でない死を迎える時、自分の流した血が淡海を救う事を知って喜んだ、と言ったのはお三輪の本心では無いと私は思う。この世の執着がお三輪のふっ切れない思いとなり語らせたに違いない。

半二の山あり谷ありの浄瑠璃への道のり、リズムよく面白く読んだが、一つを極めるにはそれなりの努力、苦勞が伴うと実感。

人形浄瑠璃と言えば門左衛門の「心中もの」、その門左衛門と肩を並べる半二の「妹背山婦女庭訓」、近松門左衛門に傾倒した半二の生涯は豊かで我が人生に悔い無しである。

◆【 R子 】

私は人形浄瑠璃も文楽も歌舞伎もみたことはありません。

本書を手にした時「私に読めるかな？」と一抹の不安がありました。

しかし大阪弁でポンポンとかけ合うやりとりで不安はなくなり、読み進めることが出来ました。

近松半二という人の生き方が書かれていましたが、それを探った大島真寿美さんの文楽愛と言うか、日本人が古来から持っているものを大切にし、引き継いでいこうとされている文学に努力の“たまもの”を感じました。

とても課題図書ではないと読めない本でしたので、出会えてうれしかったです。

◆【 TK 】

昔の映画、テレビであろう、浄瑠璃、歌舞伎の伝記だった。私にとっては、半二の深い感情が汲み取れず淡々と読んでしまった。時代物はどうも言葉の意味も把握できないのである。

しかし、読書会の良いところは、皆さんか解説してくださって本の醍醐味を教えてくださいさるのだ。

三輪の存在だ。

人形であるゆえに何年も生きている。それにしても、今のドラマに例えるならば、現代版にリメイクしなければ現代に人には身近に感じられないところがある。

これからも色んな人の感想や理解に頼って読書会に感謝していきたい。

◆【 T 】

道頓堀には、歌舞伎・浄瑠璃に限らず様々な芸事がある。お互い参考にしたり、刺激し合ったり、高め合ったりし、切磋琢磨しながら作品は作り上げられるが、それらの作品は、一つ一つ別な独立したものではなく、影響し合い、時には内容を盗んだり盗まれたりして複雑に絡み合いながら作られたものである。

作品だけに限らずありとあらゆるもの、人から物から、過去から現在から、あの世からこの世からすべてのものが渾然一体となって、ぐちゃぐちゃまじり合っただけで渦になり、その中から作品が生まれ役者が生まれる。

その渦の中で生きている半二や正三たちは、時にはその渦に巻き込まれ翻弄され失意のどん底に落ちたり、時には自らの力で渦を巻き起こし大きな成功を収めたりもした。

道頓堀の熱気のコもった渦、その中で半二の苦しみや喜び。半二自身がこの渦の一部分で、この渦の中でしか生きられないんだらうなと思う。

知らない世界のことだったが、とても面白かった。一度浄瑠璃「妹背山女庭訓魂結び」を鑑賞したい。

◆【 N2 】

妹背山婦女庭訓の話はいつの頃からか知っていたのだが、あの娘がお三輪という名前だったのだと作品を読んで改めて知り、この作品で近松半二についてその一生を初めて知った。のっけから生き生きとした会話で始まり、全編テンポの良い関西弁で書かれているせいか、浮き浮きと楽しく渦に巻き込まれながら読み終えることが出来た。

「近松門左衛門亡き後、半年かそこいらでひょいっとこの世へやって来て、成章と名付けられた」という書き方からもうユーモア溢れる作品だと察することが出来る。儒学者の父、以貫に連れられて竹本座へ行ったところから半二の運命は決まっていたのだろう。半二より五歳年下の幼なじみの正三が作った舞台の大道具や仕掛けに驚き、正三の作家としての成功にも嫉妬するどころか「天晴れやなあ、さすがやなあ」と喜ぶ感覚、しかし「一矢報いたるわ」の気持ち。有隣軒で十分学ばせてもらい、文三郎にしごかれ、金銭の心配をしながらも浄瑠璃の台本書きに没頭できたのは、妻や娘、お末、作中のお三輪など女性陣の助けがあったからだろう。その助け人達に巡り会えたのもやはり半二の持って生まれた明るい気性によるところが多かったのだと思う。

道頓堀、芝居小屋界隈の賑わい、才能溢れた作家達、人形遣い、太夫、音曲、後見、人と交わって出来る渦、虚実の渦、竹本座と豊竹座、浄瑠璃と歌舞伎、自分が書いたものか書かされたものか、作中にも実生活にも至る所に渦が巻き起こり賑やかに生き生きとした有様が読み取れる。

最後の三千世界の章でお三輪が語るところが面白かった。人の命は尽きても、浄瑠璃人形は世紀を超えて生き続ける。そしてお三輪こそ半二の言う浄瑠璃そのもの。お三輪に女庭訓に縛られずに、自由に自身の気持ちのままに行動して良いのだと語らせている。半二と正三

の料理茶屋での話も面白い。お三輪も高砂屋平左衛門もどこからともなく現れて狂言作者のそばに居座る。そしてこの世で生きていくために、この世と狂言の世界との渦の中へと作者を巻き込んで行ってしまふ。

この本の書き方が半二の一生を舞台上で演じているようで、幕開きは会話で始まり柝の音で幕を閉じている。

半二の手元にあった近松門左衛門の形見と言われる硯を一目見てみたい。

この硯から後世に残る沢山の作品が拵えられたと思うとただの石の塊とは思えない。

◆【 K子 】

第161回直木賞受賞作品です。近松半二という実在の文楽(人形浄瑠璃)の作家の話です。伝統芸能の文楽にスポットを当てた作品です。渦という題名にもあります様に「無限」のものの中に読者を引き摺り込んでゆきます。テンポのいい大阪弁・江戸時代の大阪道頓堀の賑わいの様子。半二と言う浄瑠璃に魂ごともっていかれたような男の生きざま。彼をとり巻く人々(悪人はいないのです)長編なのですが時間も忘れて半二の世界(夢と現実・狂気と正気の狭間)に浸るのも有りかもしれません。

深掘りして人形浄瑠璃に興味を持ち、タイトルにもあります様に演目の外題「妹背山婦女庭訓」と言う作品が核になって登場人物の「三輪」と言う主人公が「魂結び」に繋がってくるのではないのでしょうか。文楽開眼の手引になるかも……。

◆【 MS 】 備忘録として

初めて人形浄瑠璃を鑑賞したのは20年程前、徳島で。操り人形だと解かっているも、人形遣い・義太夫・三味線が三位一体となった雰囲気の中、私は『傾城阿波の鳴門』の中に居た。作者は近松半二ほか4名。

今月の課題本は、幼い頃から人形浄瑠璃に魅せられた、その近松半二の物語。大島真寿美の筆は、江戸時代の大阪道頓堀界限、歌舞伎よりも上をいく物語をと苦悩する半二の姿にも悲壮感を漂わせない。私は作品世界に吸い込まれる。芸に魅せられる恐ろしさとその奥深さが、半二だけでなく、失意の中で亡くなった吉田文三郎師匠や、酒に殺された竹田治蔵などにも見受けられ、大島真寿美は人間の深淵を見せつける。読み進めていくうちに、p202「この世もあの世も渾然となった渦の中で、この人の世の凄まじさを詞章にしていく」という言葉が、これでもかと胸を締め付け、鳥肌を立てさせる。

近松門左衛門が名声を手にした頃から、浄瑠璃にたずさわった人達の情念や執念、怨念などの魔物を引き連れ、江戸、大阪、京などの境なく渦の中に吸い込み、半二を通して新しい浄瑠璃の魅力を新しい世界に生み出させる。だからこそ、浄瑠璃を見た私達は時空を超えて物語の深淵に魂を抜かれる。「虚にして虚にあらず、実にして実にあらず、この間に慰みがあるものなり」という言葉が、作品全体に染みわたり、読み手に心地よささえ与えてくれる。

読書会で、『妹背山婦女庭訓』に登場するお三輪の存在とその生き様が話題になった。終了後、図書館に行き会員の方が教えてくれた『妹背山婦女庭訓』(橋本治/文)を借りた。一藤原鎌足の息子淡海は、三輪の里で烏帽子折(えぼしおり)求馬(もとめ)に身をやつして機をうかがううち、杉酒屋の娘お三輪と入鹿の妹橘姫(たちばなひめ)に恋い慕われる。淡海は入鹿の妹橘姫の裾に苧環の白い糸を、お三輪は淡海の裾に苧環の赤い糸をつけ、後を追って三笠山の御殿へたどり着く。嫉妬に逆上したお三輪は、鎌足の使者として御殿にきていた漁師鱧七(実は金輪五郎)に刺される。入鹿退治に必要な「疑着の相」ある女の生き血入用のためと知ったお三輪は、恋人淡海に役立つことを喜んで死んで逝く。鹿笛によって入鹿は魔力を失い、鎌足たちに征伐される。一

うらむ。お三輪は刺され息絶えるまで、何を想っただろうか？

江戸時代に生きたお三輪。女の情気は好いた淡海を追いかけて御殿にまで忍び込む。誰かに諫められたら「それがどうしたの？好いた男を追いかけて、御殿に乗り込んだだけじゃない」と言ったに違いない。世間は、婦女庭訓の名で、男衆に都合のいい女を創り上げ、小さな世界に閉じ込めようとした。ところが、お三輪は縛りつける世間をもとせず、所詮、男の身勝手じゃないとあざ笑う。だがお三輪は、好いた淡海と一緒に死ぬのでもない、怨んで怨霊になるわけでもない、男を呪うわけでもない、けったいな理不尽な死に方なのだ。雛鳥のように久我之介と相思相愛で、ロミオとジュリエットのような家の確執で、この世で結ばれないのなら、あの世で結ばれるために一緒に死ぬことは、何となく共感できる。しかしお三輪は、好いた淡海本人ならまだしも、彼の父鎌足の部下金輪五郎に刺されたのである。政敵蘇我入鹿を成敗するという大義の為に。自分の死(命)が、好いた男の本懐を遂げる為に役に立ったと単純に喜べるだろうか。結局は男衆の都合の良いように物語として美化されただけではないか。理不尽に殺され、怒りや恨みや悔しさが先に立たないのか……。

そうか、お三輪は息絶えるまでに、何もかもを一即多にしたのか！女が男を“好く”とは、嫉妬も、怒りも恨みも悔しさも、好きの渦の中に吸い込ませ、一即多多即一にして、ここまで凄まじく狂おしく愛おしく「死をも喜ぶ」という感情を噴き出させるのか。還暦を過ぎて“好く”の深淵を知る。果てさて、私はここまで人を好いたことがあっただろうか？

いよっ、お三輪さん、かっこいい！これからも三千世界に生き続けてね！

◆【 MM 】

読書会の当日、率直な感想を述べた。「大坂弁が調子よくすらすらと読み進められたが終わりのあたりのお三輪が出てくるのが鼻についてくる。お三輪にしゃべらせすぎて興ざめだ」と。半二が妹背山婦女庭訓を書くときに降りてきたお三輪。お三輪が語る場所は字体が変えてあり、最初は「ふむふむ」と読んでいたがそこに割かれる度合いが増えるにつれげんなりした。もっと話の世界に入り込みたいのに、このやり方はどうなのか…。

私のこの感想を先生が拾って下さり「お三輪をどうとらえているのか」「お三輪の位置づけは」と問われたがその時の私にとってのお三輪は妹背山婦女庭訓に登場する人物の一人でし

かななかった。だからその人がなぜこんなに話すのか、説明するのか違和感を感じるなあ、くらいにしか思っていなかったのだ。そこが今月の大きなずれだった。

お三輪の出現、表現方法を私のように違和感と取らなかった人との違いは何か。そもそもの『妹背山婦女庭訓』を知っているかどうかである。

まず『妹背山婦女庭訓』を読んでみた。絵本で借りてみた。歌舞伎絵巻というシリーズの『妹背山婦女庭訓』(ポプラ社、2012)。この歌舞伎絵巻の他のシリーズは図書館にもあるのは知っていたが岡田嘉夫の絵がとても個性的で今まで手にとって読み込むことはなかった。今回読んでみて、この絵が話の雰囲気やうまく表しているな！と思った。印象的なシーンはページが倍に開くようになってとても綺麗だったし妖しさも出ていてこの画家だからできたことではないかと思えるほど良かった。文は橋本治、『桃尻娘』を書いた人である。長い話をコンパクトにまとめてあった。さすがだなあと思ったのでこのシリーズは他の4冊も読み進めることにする。

絵本を読んだ後、浄瑠璃って実際どんなものなのと思って動画も見てみた。便利な時代に感謝である。浄瑠璃の入門書も借りてばらばらとめくってはいたが、動画で見るとダイレクトに伝わって感激した。人形を3人で操作する。操作する人の顔は見えたままなのか…と思ってしたのは動画を見る前で、見始めると人形にしか目がいかなかった。人形が人間にしか見えない。3人であの動きを出せるのが驚きだ。実際に観たらどんなに感動するだろうと思った。

絵本と動画を見たあと、お三輪が出てくる婦女庭訓の章から最後までもう一度読んでみた。こんなに違った景色が見えるのか。すると私の中に入ってきた。話もお三輪も。半次も正三もみんな生き生きと目に見えるようだった。あの鼻についてお三輪の語りのくだけたって、なにも違和感を感じなかった。何でしょうこのマジック。『妹背山婦女庭訓』を読んだり浄瑠璃の動画を見ただけなのに。いきなり世界が広がった。

お三輪を使った語りはどうして用いられたのか、私なりに考えた。『妹背山婦女庭訓』の中では想っていた淡海の役に立てるとはいえ、命を捧げたお三輪。しかも憎気、激しく嫉妬深い感情、これは人が持つてはいるが表に出ることはないことが多いかもしれない、しかしこれを前面に出して(というイメージで)死んでいったお三輪。そのお三輪を使って語らせたのは死んだ後のお三輪は「劇中では亡くなったけどお三輪は生きているんだ」と感じさせたかったのではないか。お末も許婚と結婚できなかったけれども落としどころを見つけて与えられたところで咲いていた、輝いていた。お三輪も命こそ取られはしたが、その後も現代まで300年を越える長い間に何度も上演されて人々から「ああ、お三輪」と心に存在を残し、生きている。「おかげさんで、私、まだまだちょくちょくお声がかかりますのやで。ふふ」というお三輪の声が本当に聞こえてくるようだ。

作者の大島真寿美はインタビューで『妹背山婦女庭訓』にとっても魅かれて書いたと言っていた。その好きな気持ちは存分に伝わってきた。しかし、知らない人が読んだら冒頭の私のような感想になることもあるかもしれない。これはもったいない。今回は読書会に参加することで全然違う世界を見ることができた。この広がりを持てるかどうかが大切だ。みんなと集まっていろんな考え方に触れることができありがたい。

2021年8月

課題本 『ある男』

平野啓一郎/著 文藝春秋 2018年

読書会を終えて

講師 吉川五百枝

この作品の発端に出てくる“小説家”の「私」は、話が始まる序で自分の事を明かした後、すーっと遠ざかってしまった。「私」は、作中人物である弁護士の「城戸さん」に、読者の目を引きつけておいて、自分は、城戸の背中を追う位置に退く。まるで NASA の司令室から、宇宙船の中を撮すスクリーンを城戸と一緒に眺めている様な感じだ。

地に足が着いていないふわふわした無重力空間で、地上と同じ生命活動をする宇宙飛行士達の姿勢をイメージしてしまった。「城戸さん」は、固定されない浮遊する登場者達をつなぎ止めようとする。

「私」が主人公と目した城戸は、あまりページが進まないうちに、事故死した谷口大祐という人物が別人だったという事件に巻き込まれる。まだ 300 ページも残って居る。早々と大筋らしいものが出てきてしまった。私の予想では、他人になりかわりながら、素知らぬ顔で暮らす無難な日常から話を起こして、次第に日常が非日常に変化していくのかと考えた。本を閉じてみると予想は外れたが、話の先を自分流に創作しておくのも楽しい。

謎解きに従っているうちに、戸籍売買による名前の変化に驚いたものの、その話だけではすまない内容を目論んでいると気が付いた。

城戸の職業が弁護士だから、様々な事件に立ち会っていてもおかしくなく、話を広げるのには便利な職業に設定したなあとと思う。所々に、別の裁判の進行も書きこんで一呼吸おかせるとのにも都合がよい。

戸籍を変えてある人物になりかわるのだから、それを繰り返されると、途中で何回か混乱させられた。登場する全員が浮遊していたのでは収まりが付かないので、弁護士の城戸章良、依頼者の里枝(武本姓で生まれ結婚で米田になり再婚で谷口になり夫谷口の死亡で武本に)、城戸の妻香織、息子の颯太、谷口大祐の元恋人後藤美涼、大祐の兄谷口恭一、城戸の同僚、などが地面に打ち込まれた杭のように現実感がある。その杭と、漂っているような男達をつないでたぐり寄せる役割が、城戸を中心にして、後藤美涼、谷口恭一に背負わせている。

謎に隠されている出発点が、殺人罪の死刑囚小林謙吉の息子である小林 誠だ。彼は、小林から原になり、殺人者の息子だという「出自」から逃れたくて、更に田代昭蔵、曾根崎義彦と戸籍を交換、その後、曾根崎姓を変えて、谷口大祐になり伐採作業中の事故で亡くな

った。戸籍交換を辿る謎解きは、それぞれの名前が持つ物語を書き集んで進む。小林 誠の物語は、書き起こせば別の作品になりそうだ。

「谷口大祐」は、宮崎県S市で武本里枝と結婚し3年9ヶ月を平穏に暮らした。

宇宙空間の浮遊感を連想させた謎は、現代人の読み手が、戸籍というものは確固とした1個人を特定するものだと思込んでいることから起きる。

以前読んだ『人類最年長』（島田雅彦作）で、159才まで同じ頭、同じ身体を何人にも使い回して上書きする人物の登場を思い出したが、今回の様な理由で戸籍交換があり得ることは、想像もしなかった。

そこで、改めて、この浮遊感を考えた。

自分を自分だと証明する物は何だろうか、と。運転免許証、戸籍謄本を取る。それはつまり、その戸籍の内容が、そのまま自分そのものを保証すると考えている。だが、敗戦の中で残留孤児となり大陸に残された子どもに、戸籍はどんな役に立っただろうか。

そして、戸籍があるばかりに、選んで生まれてきたわけでもない「出自」を問われ、自分の人生が破綻していく場合もある。400万年ほど遡れば、人類は誰も「出自」が一致する。たかが数百年の目の前だけの「出自」で自他を判断する人もあるが、それがなにになろう。

城戸が探し当てた小林 誠は、殺人犯の戸籍から離れるために、他人の戸籍を手に入れてなりすまし、他人の過去で自分の人生の上書きをするつものように何回も繰り返して「谷口大祐」に至っている。

戸籍によってその人を特定することは、国籍にも通じる。城戸弁護士は、在日朝鮮人の三世だと言うが、同時に国籍は日本人だとも言う。戦時中に朝鮮半島や侵攻した地で行われた皇民化政策も、日本の皇民として名前を押しつけた。今、日本は、戸籍簿によって個人を特定しているが、電子化が進み、世界が入り交じってグローバル社会になれば、「戸籍」や「家族」がどんな意味を持つか問題を投げかけて来る。

そんな観点に立てば、小林 誠は、穏やかにS市で林業に精を出す「谷口大祐」でよかったのではないかと思う。戸籍や名前が何であれ、いずれも仮に身につけているに過ぎない。共に暮らした里枝や悠人や花、それに彼を知る全ての人達の中にまいた彼の因は、「小林」という姓も「仮名」にして流れていく。残りの人生を生きる武本里枝が、「谷口大祐」と過ごした3年9ヶ月を幸福だったと思えるのなら、「仮名」(A MANとでも)であったとしても、そう思えたことを共に喜びたいと思う。「仮」を裁くのは、私では無い。

城戸弁護士と妻と後藤美涼、武本里枝との間。谷口大祐と兄恭一と後藤美涼との間。男女間の微妙な感情の揺れを示す物語がある。

城戸弁護士と息子颯太との間。武本里枝と夭折した次男を挟んで夫、長男との家族関係。それぞれの家族という塊が持つ葛藤。どの関係も、小説にはいくらでもありそうな波乱や凧の物語である。

〈とにかく、他人の人生を通じて、間接的になら、自分の人生に触れられるんだ。誰か心情を仮託する他人を求めている。〉

小説でも読んでいるような調子で事の顛末を語りながら、小説の効用を語る夫妻の会話に“小説家”の「私」の口元を見るようで、ちょっと可笑しかった。

人は「仮」でなければ触れられない現実を抱えて生きているのかもしれない。
無重力では生きられない苦の地上を、小説は少しの間、宇宙空間にするのだろうか。

読書会の余韻の中で「三行感想」

◆【 YA 】

読み終えて、表紙装丁の絵がずっしりと何か重くて不安なものを訴えているよう。
上に沢山の積木を抱え、土台は細く僅か上の何十分の一かの支えしか無い。
土台の一つでも傾くか外れると全てが崩れてしまう。人の生活の或る象徴的な形に見える。
元通りになおすには、その傾きと外れた原因を知らなければならない。

里枝が新しく築いた家庭の幸せ、その再婚したやさしかった夫の死と、その夫が全くの別人であったことを知った衝撃。里枝の心と体がグラグラと崩れる音が聞こえて来そうな気がする。その夫が一体誰なのか知りたい里枝と、それにこたえようと奔走する在日3世である弁護士の城戸。戸籍の売買や在日の問題、社会的弱者等色々な日本の中に流れ続けるテーマも考えさせられながら、あの男の過去を追求していく。

◆【 KT 】

- はじめの「他人の傷を生きることで自分自身を保っているんですよ」この城戸の言葉は重い。
- 自分の過去を変えれば別人として生きていけるのか。人権問題、死刑制度、愛とは…
…。難しい問題がいっぱい。
- 愛していた夫が別人だった。城戸の「探偵ごっこ」で本当の人物にたどりつく。
悠人の「……自分が父親にしてほしかったことを僕にしていたんだと思う……」優しい悠人にホロリ。良かった。
- ストーリーにひかれて一気に読めた。
- 題名の「ある男」は誰なのかという皆さんの意見も興味深かった。

『ある男』を読んで

◆【 YA 】

何とも不安定な、今にも崩れ落ちそうな課題本のカバーページのブロックの積木、そして「ある男」……先行きが不透明でミステリアスな展開が連想された。昔のことでは無く現在にも社会的な問題として起こっていることだ。

次男を病気で亡くした里枝は夫と離婚し、(高校卒業以来)14年後に田舎の実家に戻る。そこで谷口大祐と名乗る男と結婚する。大祐の過去は決して幸せとは言えない辛い人生だったが、里枝にとっては、女の子「花」も生まれ、長男の悠人と4人で穏やかな幸せな日々

を送っていた。僅か数年後、大祐は不慮の事故で死ぬ。連絡を受けた大祐の兄が「これは弟の大祐ではない」と断言する。大祐は全くの別人だったのだ。ここから色々な問題が取りあげられる。大祐と名乗ったある男の正体だ。

戸籍をとり換えて、他人の人生を生きるという事は一体何の目的なのか。その過去をも引きずって生きるのは何の為か。お互いが戸籍の取り替えを納得出来るのは、決して過去が順風満帆とは言えぬ辛い人生があったはず。

過去を変えてまで、戸籍を変えてまでも生きる為に、その選択をせざるを得ない男たちの姿が切ない。里枝は大祐と名乗った男が一体誰なのか、在日3世の弁護士城戸に依頼する。城戸も家族持ちだが、里枝の依頼にのめり込む夫に妻は迫る。他人の人生を追い捜し求める事で自分の人生を深く考えられると在日として生きる城戸の負目。弱さが伺える。在日の問題は今も解決していない。

城戸等の協力で大祐を名乗った男が判明する。「原誠」だ。城戸は彼の死後を追って取材し、誠の父親小林謙吉が殺人犯だったことを知る。殺人犯の息子として仕事も失い体も壊し、自分の過去を消したかったに違いない。殺人者は個人だが、家族、親戚にも及ぶという加害家族の問題も呈記している。誠にとって里枝との短い生活が何ものにも替難い至福の時だったのだろう。里枝にとっても母の性を継いで生きる原誠だった彼との生活は安らぎのはず。誠の存在と過去を追った城戸が、犯罪者の息子という立場と、自分の在日の立場で、誠をやさしい眼差を送るのに胸が熱くなった。

読書会で戸籍の話が出た時、吉川先生のお話があった。その中で先生が言われた仮名…けみょう…という言葉が印象に残った。仏語で実体のないものに仮に名づけているだけ、或いは名づけられているだけという何ともフワフワした宙に浮んでいるような言葉だが、反対に緊張してピンと固く張っているものが少し緩んでホッとす。人間の長い歴史の中でほんの一瞬を生きるだけの個人の生は戸籍で認めるものでは無く、その個人の生の中で培われたもので認めるということだろう。

戸籍は決して蔑ろにされるものではないし大切なものだが、戸籍そのものを頭に祀って置くだけのものではないのかも知れぬ。

戸籍は生活を送る上で便利なものではあるが、谷口大祐や原誠等に依る戸籍の交換を考えると、絶対的なものでは無いと言えるのかも。

不安定な積木のように、何かの拍子に一瞬で壊れるかも知れない人生である。

◆【 TK 】

『マチネの終わりに』を読んで、次にこの作品を読みました。共通点は社会問題に触れて、人間関係においては、後になってえっ！ そうなの?!と事実の違うのに気がついていきます。そして、それでも人を愛せるという事でした。あるいは、愛せるだろうか?と問いかけているのかも知れません。

殺人者の血が流れているXは、他人の名前を持ち結婚して人生を歩んでいます。殺人者の血が流れて、愛されていない子供時代を経て人を愛せるのだろうか?と葛藤があったの

でしょう。でも里枝さんと結婚して幸せに暮らせる事によって自分は人を愛せて幸せになれたと言う事を証明出来ています。一緒に暮らした子供は、お父さんは父親からして欲しかった事を自分達にしてくれたと認めています。

人間は誰にでも罪をおかす傾向はありますが、罪を犯せば悪魔が喜び、人を愛せば神は喜ぶ。人間は神を喜ばせ、人を愛して幸せにできる事を証明したいものです。

私個人としては、名前を変えても、引っ越しをしても本質は変わらないのでいつも神に喜ばれる事に焦点合わせて生きていきたいと思っています。それでもなかなか罪の傾向は簡単には拭い去ることは難しいです。罪という言葉とか殺人者という言葉は極端かも知れませんが、確かに人間は常に罪とか悪と闘っているのが現実です。病気にならないように常に闘っているのと同じです。

今迄の事は無かったことにしてやり直す事が出来れば別人としてXのように生きる必要は無かったでしょうが、人間は今迄の色んな事に折り合いをつけて生きていく事しかできないのが現実です。

神は心を見ておられいつも許しておられる事は人間にとっては救いです。

この小説を読んで人を愛して生きることができるといふ人間の証明を見た気がしました。

◆【 T 】

知らない場所に行き、誰も自分を知らない人の中で暮らしてみたい。過去を切り捨て0からスタートできたらどんな人生を送るだろう？と考えることがある。しかし、谷口大祐や原誠にとっての捨てたい過去とは単に現状に不満があるとか、現実逃避を考えているだけではなく、捨ててしまわないと生きることができないぐらいの厳しいものであり、生きるために過去を捨てたといえる。

しかし、他人と戸籍を交換し、名前を変え他人の過去の上に新しい人生を送ることは可能であろうか？自分の過去を無いものとするのはできるのだろうか？書類の上ではできても、人と関わろうとすると、どうしても本質があらわれる。その本質は、その人自身の過去が作り上げたものではないか？

原誠は、宮崎県で林業の仕事に就いた。そこで、里枝と出会い幸せな結婚生活を送った。彼は、温厚で独特な落ち着いた雰囲気があり精神的にも肉体的にも健康であったという。それは、彼が名乗っていた「谷口大祐」の本質ではなく「原誠」の本質であり、彼の死は、彼が交友を持った人たちに深く悲しまれ、誰一人として悪く言わないというのも「原誠」の本質であろう。たとえ名前は変わっても本質は変わらない。

彼は過去を偽り名前を偽っていたが、里枝や二人の子どもとの間の感情や行動には偽りはなかった。「原誠」の本質で彼女たちと生活していた。きっと、いつの日にか「原誠」として彼らから愛され、本名で呼び合う日が来ていただろうなと思うと事故にあったことが残念である

が、里枝と二人の子どもの心の中には父親の「原誠」夫の「原誠」が存在し続けていると思う。

◆【 N2 】

サラッと読める面白い作品と思ったのですが、戸籍制度、皇民化政策、関東大震災、在日、死刑制度、戸籍交換仲介ブローカー等、いろいろな問題を含んでいて読み応えのある考えさせられる作品でした。

名前とは何なのか。戸籍とは何なのか。自分を取り巻く人々との関係とは何なのか。

序文のバーでの出会いからしてどこかミステリー小説を思わせるようでした。

最初は仮名を名乗っていた男が本名は城戸だと告げ、他人の傷を生きたことで自分自身を保ち、嘘のおかげで正直になれると言う。見た印象や、面立ち、名前、職業、家庭環境から自身の本質とは関係なく、他人はその人を決定づけてしまうのだろうか。城戸と名乗るこの男も、本当に弁護士の城戸章良なのだろうか。

原誠はいつか殺人者の父と同じ過ちを犯してしまうのではという不安をかかえ、同じ血が流れている自分の身体が嫌でたまらない苦しさ、他人の偏見を抱えながら生きてきたのだが、谷口大祐の戸籍を手に入れたことで、嘘のおかげで、里枝との三年九ヶ月の幸せな暮らしを得たのである。

城戸自身も谷口大祐の名をかたり、「X」になりすまし一時の悦びを感じている。自分ではない者になってみたい気持ちは誰にでもあるのかもしれない。そしてそれが遊びであれば、秘密めかした楽しみでもあるだろう。しかし自分の咎でもないのに必然的に過去や置かれている環境に我慢できず、素性を知られることの恐怖などからどうしても他の者になりたいと切望する人がいるのも事実のようだ。

「X」の苦悩も当人には全く咎のない運命的なものであった。

城戸はある男「X」の正体を突き止めるために彼の人生にのめり込んでいくのだが、並行して自身の暮らしと立場を見つめ悩み解答を見いだそうとしている。「X」の背中を追っている城戸はルネ・マグリッドの作品『複製禁止』の不在の表象ように「X」の背中に見えるのだが実際の顔は見る事が出来ない。死んでもうこの世にいないからこそ、谷口大祐の正体を探すことで原誠の存在が浮き上がり気になってしまう。そしてそれが城戸の暮らしを見つめ直すきっかけとなる。

谷口大祐としての三年九ヶ月は原誠にとって一生に値する幸せだっただろう。愛に過去は必要なのだろうか。嘘のおかげで幸せな今があるのなら、過去が偽りであったとわかってでも変わらずに愛し続けられるだろうか。原誠を慕う悠人は父親の苦悩と悲しみを理解することでさらに父親を愛し成長していくのだろう。

◆【 K子 】

平野作品は初読です。とても面白く読みました。推理小説は苦手な分野でしたが…

主人公(?)は自分の出自を消すために戸籍売買を繰り返し赤の他人として人生を閉じま

す。主人公(私の思う)は殺人者の息子となり人生が狂ってしまいます。彼の根底に流れていた「やさしさ」を持って人を愛することを知り、短い期間でしたが彼の人生の中で心穏やかな日々だったと思います。

タイトルの「ある男」は誰かという話題にもなりました。A MAN となっていたので一人・男は確かなことですが登場人物がすべて問題を含んでいる人達なので…

この作品に接し戸籍感について考えさせられました。先生から「仮名(けみょう)」—存在そのもの—本体と言う事を教えていただき、作者が読者に投げかけたものの深さに未だ理解が乏しいです。

◆【 F 】

こんな人生もあり得ただろう。今の自分の全てを捨てて逃げ出してしまいたい。日々何かに追われるように生きてこれが本当に自分が求めている人生なんだろうか？後先なんて何も考えず電車で飛び乗って数日だけでいいから何もかも忘れて過ごしたい。

ほう思っってホームで待ちよるんじやが、ローカル線じゃどうにもならんねえ。ぜんぜん 電車が来んのよ。

待てども待てども電車が来なくてそうこうしてるうちに逃避したい情熱も冷めてしまい、定刻通りに発車する電車を見ないまま入場券分の 150 円を支払った自分は駅を後にして、すっかり遅れてしまった元の日常に帰っていくのであった。何も考えずに逃げ出さなかったのは救いであることに間違いない。1 時間に数本しか来ないダイヤに救われたと思うべきか、このように不便な環境こそ自分を拘束する退屈な人生という檻を構築している鉄格子なのか。

もし今の自分じゃない自分がいるとしたら一体どんな人生を歩んでいるんだろう？その好奇心を満たすために、今日は何となく休みの日だから自分に正直な自分を演じるべく駅にやって来た。でも諦めてラーメンでも食べて帰ることにするよ。喫茶とラーメンの店舗数が不思議と多いこの町で僕は明日こそ真面目に生きていくんだ。何者にもなれず、かといって誰かに憧れるわけでもなく、ただただ普通に明け暮れる。死ぬのが先かこんな毎日が自分だということを誰も教えてくれないことを知るその日まで。



[暗転]

[舞台中央 ストール×1]

[ネットでオラついでる風の男 板付]

自分らしく生きているって素敵じゃないですか、僕はぜんぜんそんなこと思わないんですけど。多くの方は自由に生きている風の人を見るとうらやましく思いますよね。まあ、羨むだけで変わるための努力はしないんですけど(じぶんのことやで)

今回の課題本、「ある男」ですけど、その「ある女」になら出会ったことがあるんですよね。母子家庭に育ったけど親が嫌い、地元に住続けたくなかったから、逃げるために結婚した人。離婚して今はシングルマザーだけど、楽しくやっている(ほんまの話)

自由に生きている風の人を見るとうらやましく思うかもしれない。でも、ほんとうの自由は自分で自分の死に方を決めて生きていることだと僕は思います。どんなに楽しそうでも皆それぞれ別の苦労がある、これ月並みな言い方ですけど実感がこもってます。だからもし、漠然とした自分の形に取り憑かれているなら何してるのか分からないけど本当に楽しそうに生きている人に会うことも大事だと思います(できれば一緒に生活したらええねん)

楽しく生きるために苦労をあえて引き受けて自分のものにしてしているのかもしれない。そんな生き方、価値観は理解できなかったのも、それなら自分は楽しそうに生きなくてもいいやと思うようになった。そして自分が楽しめる生き方を探す方向に人生を転換してしまった、これが私が人生を本当の意味でドロップアウトし損った理由ですね(誰に向けて言ってるねん)

[※()内はNでお願いします]

[N原稿、別添付しています！]



上ふたつは、創作。1つは物語風の文字で読まれることを意識したもので、もう一つは台本風に自分が演じることを意識して、実際の原稿を真似て書いたもの。

人に見せられるクオリティではないだろうけど、今回の感想文を書くにあたって、自分が生きてきた中で感じていることを整理しておかないと感想を上手く形にできなかったの。

同年代にはプロとして活躍されてる方も多くいらっしゃる訳なので、こんなものは何にもならないのですが、自分1人にとっては形にしておく意味もあるような気がしないでもない。平野啓一郎のホームページをみて、今回の本が30代の悩める大人に向けたもの(という側面もある)ことを知り、自分の想いを形にしました。

—————

八月課題本は最後まで読めなかった。いつもは今、読まなければ一生読まない！と張り切って飛ばし飛ばしにでも読み通すのだが。今回は平野啓一郎さんの書く文章が好きになったのでまた読むと思いこみ止めてしまった。

とりあえず皆様の感想を聞いて頭の中でその後の展開や受けた印象を補足して自分なりに感じたことをまとめよう、このような心算で読書会に参加した。

普段と違うやり方をすれば、読書会に参加することの効能を新たに発見できることを期待したりしながら。

展開のネタバレや読後に受けた印象を聞いて、自分の中での「ある男」という作品に対して抱いていた感情を整理されていった。

すごく失礼なことを書くことになるが…

作者の書く文章に惚れてファンになったのは初めてなのは確かだが、そう言いつつも、ミステリーの部分にはこれっぽっちも惹かれていなかったのかもしれない。オリンピックに対する気持ちが整理されていないことなどから自分の好奇心があまり読書に向いていなかったこととは関係なしに、そもそも、そこまで興味を抱かなかっただけなのかもしれないと思うようになった。

[以下、ネタバレを含みます。]

そもそもこの物語の発端は、自分の出自から逃れるために(戸籍偽装の)罪を犯すという矛盾を孕んでいる。

色んな生き方がある、それは選択して勝ち取ったものかもしれないし結果的にそうなっただけかもしれない、振り返って整理のつくことだと感じられていることもあれば、破滅的でやり直せないから生贄を求めようとしている気持ちもあるだろう。しかし何であれ、人間としての在り方、自分の生き方を考えるならば過去を遡って定義されるものではなく今の精神の中に見出すべきだと30に近づくにつれ思うようになった。

だからなのか、平野啓一郎さんが生み出した男について何かこう釈然としないものがある(それがために読み進められなかったなんてことはないだろう)。

そうだ！ 男に対して説教してやりたいのかもしれない。あるいはどこかのバーでお互いに知り合うことなく出会って話をしてみたいのだろう。そんな時は、ザ・プラターズのオンリー・ユーなんかがかかっていたらいい。んで「ぜんぜん関係ないかもしれんけど、オンリーユーなんだよ！」とか酔って管を巻くんだ。

読書会の中で話せなかったが、そういえば「ある女」にあったことを思い出した。自分の境遇から逃れたいがために結婚して知らない土地での生活を始めた人。戸籍、非合法なものではなく、結婚によって姓が変わるという当たり前にあることでも、それが別人になりたいという気持ちを叶えてくれる手段になっている側面は、現実的に、確かに、あると思う。

気持ちの持ち用ではどうしようもできなくて、どこまでも形に囚われているのが人間なのかもしれない。そういう意味では、男の気持ちも分からなくもないか。かなり本格的に形から入るタイプだったのだろう。

すごく好きなシチュエーション。思わず情景に入り込みたくて缶ビールを開けて急いで半分飲み干してトマトジュースを注いで、飲みながら読んだバーのシーン。そういや自分も隠したい気持ちがあるわけではないが、名前を伝えずに常連として店主と親しくさせてもらってるラーメン屋があったりする。そこではいくらお喋りをしていても現実には何かを一緒にする訳ではない、どこまでも店主と客の関係だから名前なんてなくてもいいのだ！

お互いの匿名性というのは別にバー(酒の場)にこだわる必要もないのかもしれない。この読書感想文でさえも私の名前は英語2文字の記号でしかない、SNSでは性別すらも偽って全くの他人を演じることだって可能だ。ただ嘘をつく時に、そこに私はどこまでいるのかを把握し続けていないと妄想に囚われるようになりかねない。



平野啓一郎の文体について、自分は「京大卒」で「芥川賞受賞作家」という肩書きの通り、頭のいい人の書く、勝手な想像だが目の前の世界を自分なりに言語化して生きようとしている人の書く文章だと感じた。

読書会では、先月の「渦」の作者と比較すると性差が明らかナリトイウヨウナ話が出た。仮に平安時代のように男女で使用する文字が異なっていたりすれば常識的に判断しやすいのだが、性差というものをそもそもあまり意識せずに過ごしているので、ぴんと来なかった。

だが、文章に性差がある(でる)というのは面白い視点だとも思った。それは読み手が一方的に定義するもの、つまり(想定される)作者の性別と目の前の文章を照らし合わせて〇〇らしいと判断するものなのか。実際にそのような男らしい文体や女らしい文体というものがあり経験によって見分けられるようになるのか。

またその場合、その男らしいあるいは女らしい文章を生み出した作者は、何に影響されているのだろう。身体(脳みそ)がそのように機能させている心が認める性なのか、置かれてる立場・社会的な役割が物事に対する視点に影響するのか。

そもそも私の思う私がどこまで性別に関連しているのかも人によって異なるだろう。また作家という働き方はどのように性に縛られるのだろうか？同じテーマでともに文才のある女性経営者と専業主婦に書かせたらどのような文章が生まれるのだろうか？などなど時間が経てば経つほど多くの疑問が生まれた。

◆【 MM 】

不思議な小説だった。複数のエピソードと異なる視点が合わさって感じたことのない面白さだった。一気に読んだ。

漢字を多く用いた表現で堅苦しいような感じもしたが先を知りたい欲がページをめくるごとに大きくなって次第に気にならなくなった。

「ある男」とは誰なのか。弁護士の城戸・里枝の夫(原誠)・里枝の夫がなりすましていた谷口大祐という男・刑務所にいる戸籍を人に売りさばく男・・・ちょっとあげただけでもこれだけいる。それぞれが抱えている問題や秘密、それぞれを主にしての小説ができそうなほどではないか。これを一冊の小説にまとめた作者の力は大きなものだと思う。

ある男たちのそれぞれの話の中には自分の力ではどうしようもできない出自について書かれていた。在日である城戸。大人になるまではそのことについて考える必要もなく成長してきたが、就職を考える頃には父から「就職差別もあるから何か国家資格を取った方がいい」と助言があったり、結婚した妻の親からあからさまではないが根底にある差別意識から出る発言に違和感を感じたり、妻自身が城戸に対して差別意識を持っているという事実も明らかになった。子供には同じ思いをさせたくない、という妻の発言は城戸を傷つけるには十分であったろう。親が殺人犯だった原誠も自分の力ではどうしようもない生まれに悩んだ一人だ。彼はそこから離れ自分らしく生きるために他の人の人生を生きた。

これだけ大きく重いエピソードの中での救いは里枝の子どもたちだった。原誠との間に生ま

れた娘は無邪気で愛くるしく、先夫との子どもである悠人は思慮深く優しい。悠人は先夫よりも再婚した原誠になついていた。原誠が今まで自分が思っていた父ではない、でも父ではないと言ってもそれは名前だけが違っていたのであり父そのものには変わらない。そのことを受け入れ妹のこれからを思い守ろうとする。思わず泣いてしまった。

作者の平野啓一郎は以前『マチネの終わりに』を途中で挫折して以来だった。読書会が終わってからこの『マチネの終わりに』を毎日一章ずつ読んでいる。今が読む時期だったのだろう。毎日贅沢な楽しみの時間を味わっている。読書会の中では平野啓一郎のSNSが話題に上がった。それも見てみた。私は彼の書く小説が好きなのかもしれない。SNSは直接的で少し息苦しかった。また時期がくればリアルタイムで彼が綴るものの良さもわかるときが来るのかもしれない。

2021年9月

課題本『雪ぐ人 冤罪弁護士 今村核』

佐々木健一/著 NHK出版 2018年

新型コロナウイルス感染症に係る「緊急事態宣言」が延長されたため、開催されませんでした。

2021年10月

課題本『ねがいは「普通」』

佐藤忠良・安野光雅/著 文化出版局 2002年

広島県立図書館の貸借都合のため、課題本が11月と入れ替わりました。

読書会を終えて

講師 吉川五百枝

誰であれ、人間は、自分の見たことや感じたこと、そして考えたことを、いったん自分の外に出して表してみたいものなのだとつくづく感じました。

彫刻を主な表現手段とする佐藤忠良氏と、絵画表現の多い安野光雅氏の対談で構成されている本ですが、1912年生まれの佐藤氏と1926年生まれの安野氏だからなのか、14年先行して生きている佐藤氏が屈託なく話し、安野氏の方は、多少控えめな様子を感じ取れました。

本を開く前に「ウム？」と気になったのは題名です。

普通という言葉に鈎括弧がついています。「要注意」のしるしとして付けることが多いので、本人達か編集者かが、こだわってほしいという合図を送っているのかなと思いました。

自分だけの勝手な解釈で「普通」を読み飛ばさないで、と言われているようです。

もちろん、こちらもこだわります。どんな「普通」を願っているのかと興味津々ですから、どんどん読むというよりも、探しながらという読み方になりました。

〈何の変哲もない〉〈普通に暮らしている市井の人〉〈どこにでもいる人〉〈シツチャカメツチャカではない〉〈目立つ奇妙なことをしない〉〈平均やアブノーマルではなく〉〈入って来るそのまんま〉〈突出していない〉

気づきを挙げてみました。が、「普通」という2文字の熟語を読み解いて納得するには、私の想像と少しすれ違っていると気がつきました。私は、「普通」というのは、比べることのできる世界で使う言葉だと思っているのです。

〈怖いよね 今が 普通とおもうこと 大和市 松村和子〉

一月ほど前の新聞の川柳欄にみつけた1句です。

川柳は、事態を平たく言いますが、言葉の抜け道を敏感に防御する哲学者の言い方の例では、「あらゆる技術的な相互接続がかつてなく強まり、その強度が人口と共に増大する世界においては、実のところ例外が常態になるということだ」と言っています。コロナ禍で、これまでとは違う生活様式が入って来た実感は、言い方は違うにしても、生活様式の中で、「例外の常態化」が「普通」を意味するようになり、川柳では、それを良しとしないことを詠んでいます。

この場合のように、比べる世界にある言葉なので「普通」と言っても、その中身が変化します。結局、最後まで、お二人が願うほどの「普通」はどんなことなのかが解らないまま返却日になってしまいました。

題名には頭を傾げましたが、対談の中身は、なるほどどうなずくことがたくさんありました。対談は、30個近い区切りをつけて書き並べられています。

「紙に描いたリンゴとデスマスク」は「アーティストとアルチザンの生き方」「似せることと表現することの間」「見る力とえぐり出す力」などと共鳴しあって、絵や彫刻という表現手段を持つお二人の心意気が伝わって来ます。対談だから「文章」で書き表されていますが、心底にある「僕の彫刻を見てくれ」「僕の絵を見てくれ」という「言葉」がにじみ出てくるのが聞こえます。それだけに文学者や思想家の対談より、言葉が曖昧なところも気づきました。話し言葉の文章化なので、対談集は、流れるように読んでいき、大きく浮かんでくるものをつかめば良いのかもしれない。

例会では、それぞれ参加者が心に残っているところを語られました。

私は、お二人の共通する気分として〈自分の目でものを見ているか、自分の言葉で話しているか〉の項をあげます。

情報化社会といわれ、様々な情報に揉まれる私たちの危うさが「付和雷同」という言葉で示されています。見聞きする情報に対して、自分の物差しが重要だということでしょう。

絵や彫刻で子供達に接するお二人は、良い作品にであうことは、子供達の物差しをすることだと言われます。色々な物差しを差し出すのだと考えれば、大規模から小規模まで、世界中にたくさんの美術館があるのも解ります。そこでは、私たちが言葉で「美」と言っているものを、〈自然に心を動かされた経験の積み重ね〉として作品表現するアートの世界の物差しが見えるでしょうし、音楽も、同じことが言えると思いました。

でもやはり〈人間は自然にはかなわない〉という項を語られるのが、お二人にとっての落ち着き場所である事に安心感を持ちました。自然は、人間の承認を得て存在するわけではないと、常々私は思っていますから。

佐藤氏は彫刻家ですが、彫刻はどこにでも置いてあるわけではありません。しかし、佐藤氏が描かれた『おおきなかぶ』は、絵本ですからどこでも出会えます。私も、佐藤氏との最初の出会いは絵本でした。初めは画家になりたかったと言われるくらいですから、その絵は、生き生きとしています。

安野氏との出会いも絵本からでした。『ふしぎな絵』は、本当に不思議で、人間の錯覚を仲間と楽しく言い合ったものです。その後、次々と出版される『旅の絵本』も、あるようなないような空間を、ひよいひよいと登場する名の知れた物語の場面を探しながら旅をしました。

「言葉(ことば)」は、「コトの端」でもあるという説を実証するような対談集でした。

ただ、その端が、どこまで続き、どんな風に広がるかということは、この本の読み手にとって、また別の問題です。

読書会の余韻の中で「三行感想」

◆【 YA 】

すべてが対談集ものは初めて読み、お二人から出る言葉そのものだから受け入れ易い。又教科書に携わっておられ、佐藤忠良さんがシベリアに抑留されていたのも初めて知った。芸術の世界で活躍し、生きてゆくのは本当に厳しいものがあると思う。芸術の世界は個人の力量の世界であり、日々毎日が学びであると思う。対談は製作中の厳しい集中から解き放たれた一種の清涼剤に違いない。

◆【 KT 】

- 共に故郷に個人の美術館をお持ちの偉大な彫刻家と画家の対談集。
- お互いに敬っておられるが、特に年長の佐藤氏を安野氏が尊敬されているように思った。バイカル湖で二人で写生された時どうすることもできない違いを感じられたと。
 - シベリアの抑留生活より、その後の彫刻家としての生活の方が比べものにならないほど厳しいと。
 - 「人間の顔は表札です。中身のある心のいい人がいい顔をしています」
 - 芸術家でなくても人として大事にするべきこともたくさん語られていた。
 - 題名の「普通」についての議論もおもしろかった。

『ねがいは「普通」』を読んで

◆【 YA 】

彫刻家である佐藤忠良の作品の実物を見たことが無い。しかし彼のことは以前からよく知っている。彫刻だけでなく、翻訳ものの楽しい絵も知っている。それだけ佐藤忠良が国内外で高い評価を受ける。殊に国内では市井の人を題材にした作品が斬新だったに違いない。又満州に従軍、そこからシベリアに3年も抑留され、その体験をプラス思考に持っていかれた強靱な人間性にも驚いた。

安野光雅さんの『ふしぎな絵』や『旅の絵本』等沢山の作品があるが、直筆の絵を見たことが無い。しかし彼の作品もテレビや本屋で沢山目に触れた。題材も面白く、色彩もパステルカラーのような柔らかさで気持ちがホッとする。

この著名な二人の対談ものを初めて読んだ。安野さんより一回り以上年上の佐藤さんに対して敬意を表されている安野さんの言葉が印象深い。芸術家というジャンルの人々はチャンスも運命の一つで、世に出ることは本当に厳しいと思う。すべて個人の力量にのしかかる。

あのゴッホでさえも生前に売れたのは一枚のみだと言われる。

殊に彫刻家や画家は一匹狼の如く個人の世界が存在する。何々派とかに属さない限りは。日本画家堀文子さんの「群れない」「慣れない」「頼らない」をモットーとする生き方に触れた時はそうなんだろうと深く思った。

佐藤さんも安野さんもそれぞれの分野で、それぞれの人生を十分に全うされて、この世に遺された作品を後の人々が鑑賞出来る。長い月日の間には順風満帆ではない時もあつたに違いないが、矢張り大切なことは、コツコツと人知れずの努力をされた賜物だろう。

◆【 TK 】

初めて読書会で対談の本を読みました。対談には対談の読み方感じ方がある事がわかりました。

人が人と話をしているのを聞いているようなもので、人の話はあまり当たり障りのないところもあれば強く話したいところもあるという事です。

お二人共故郷に美術館を作り、故郷の思い出、出会った人に影響をうけています。

素朴な人普通に人からにじみ出る事をえぐり出して作品の表現をされています。

今は豊かな時代なので看板がありすぎたり、BGM がありすぎたり、ものが山積みで見た目にも感じるときにもうるさいと感じることが多い事を再認識しました。

仙台の定禅寺通りのブロンズ像が好きでしたのでこういう作家さんに出会えて嬉しかったです。

さらに仕事として、注文されて創作するのと、自分の表現としての創作はまた違う事もよくわかりました。

私は侘び寂びとかシンプルとかの気品を大切にしたいとおもいますが、今ラジオをつけてもふと気がつくとうるさい音楽を我慢して聴いていることがよくあります。今の時代は豊かだけど自分で選んで行かないと知らずしらずのうちに受け入れている事になってしまいます。自分は何を追求しているのか見失っている事になるかもしれません。

そして情報が多いのでその目で見ると先入観を持っているのかもしれませんが。まず自分で調べることも自分で選ぶ事のきっかけになります。

この本を読んでこんな事を感じました。

◆【 T 】

佐藤忠良と安野光雅…偉大な芸術家で、才能があり、素晴らしい作品を生み出していて、なお且つ沢山の人々に認められている天才。この「普通」ではないと思われる二人が思っている「普通」とは何だろう？なぜ「普通」を願うのだろうと疑問を持ちながら本を手にとった。

本の中に、「普通」という言葉が二か所出てきた。一つ目は、佐藤さんの話の中に「僕の作る人物像は、いつも普通に暮らしている市井の人が中心です。どこにでもいる人の、素朴な」人間性に惹かれるのです。そんな存在を通し、人間の厳しさを優しさを彫刻で表現したいと願っています。」

もう一つは、安野さんの言葉で、「表現と呼ばれているもの全部がそうなんだけど、『普通にやればいいのになあ』といつも思っているんです。」「コマーシャルは普通じゃないでしょ

う？……普通の時ほど、こちらの胸には迫ってくるものです。」「映画や芝居で俳優さんが表現するときでも『ごく普通にやったらいいのに』と思う。」「建築でもそうですね。…『ごく普通にやればいいの』って思います。』手間もかかるし目立たないけれど、長い間にはそっちのほうがかっと落ち着いて、人々にも認められる時が来るんです。」

二人の考えている普通とは、地位とか名誉とか金を持っているとかいないとかを判断基準にするのではなく、人間性や生き方を見ているように思える。佐藤さんの、「中身のある心のいい人が、いい顔をしています。」という言葉や、「どんなに素晴らしいものでも気品のないものはダメだ。隣人へのいたわり・憐みがないものからは本物の芸術は生まれてこない。」からも心の大切さ、生き方の大切さが伝わってくる。

気品のある態度で、周りの人々への思いやりを持ち日々を生きていくことと自然の素晴らしさに気づき自然と調和して生きることが彼らの願う「普通」なのであろう。

佐藤さん安野さんの作品とリンクしながら読めて楽しい本だった。

◆【 N2 】

本の扉を開くとお二人のいいお顔の写真が出迎えてくれます。

これはお二人の表札なのでしょう。

始めの忠良さんの一文で、忠良さんは安野さんを勉強家で物知りだと書かれています。物知りではないのです。物知りではなく、物知りなのです。つまりただ知っているだけではなく、きちんと対象を認識して、心で受け止めている人ということなのでしょう。

ある程度の収録時間の中でお二人の考えが語られたのですが、限られた字数の中にエッセンスを詰め込んであるので内容をじっくり読み込むことなくすっと軽く読めてしまいました。しかし感想文を書くに当たり再読すると、勝手に読み違えたり、勝手に解釈していた箇所が多々あることに驚き、軽く読めてしまうことは危険だと実感しました。

芸術作品は自分で見て触って見なければいけない。経験しなければいけない。時間性と哲学、思想的なものを内蔵していなければ長く鑑賞に堪える芸術とはならない。基礎であるデッサンに力量すべてが現れ、作家の力を露呈してしまう。確かに線を一本引いただけで、血の吹き出るような生々しさ、強さ、柔らかさ、落ち着き、面白さ等が表現できるまでには何千何万本の線を引いて身に付けなければいけないのでしょう。

作品の中に、モデルの過ごしてきた時間性や喜びや怒りを粘土の中にぶち込むことに彫刻家の苦しさはある。しかしその作家の葛藤を、鑑賞する者は受け止めることができるのでしょうか。鑑賞する者にもそれなりの力量が無いと鑑賞することが出来ないのです。その力を育てるにはとにかく自分の目で本物を見ること触れることが大切で、らしいものという偽物の中で触覚感が育まれていくことはとても怖いことなのです。等々、気づかされる言葉が多いのですが、何時間かの対談を編集してあるので、なんとなく中途半端な感は否めないのです。

終わりの安野さんの文章に美とは何か、それは我々が自然の中で生きていくときに、その自然に心を動かされた経験の積み重ねが、「美しい」という感性を育ててきたのだ。とありま

す。

そして佐藤さんは生まれながらにして自然のデッサン力を持っていて、そのデッサンには尊厳というしかないほどの真実をため込んでいる。と佐藤さんへのオマージュで締めくくられています。

この本の後に、安野光雅、藤原正彦の対談「世にも美しい日本語入門」を読んだのですが、安野さんの科学・数学・文学・に対する造詣が面白く、お勧めです。

◆【 MM 】

タイトルにある「普通」ってなんだろうという話になった。普通があるからには特別があるのだろう。普通ではない何かがあるから普通が際立つ。本文に何度か「普通」という言葉が出てきて、それぞれの「普通」に相對するものがあつたように思う。

佐藤忠良が書いた冒頭の安野さんとの対話というエッセイでまず出てくる。「僕のつくる人物像は、いつも普通に暮している市井の人が中心です。どこにでもいる人の、素朴な人間性に惹かれるのです。」とあり、「地位や名譽の有る無しに関わらず、中身のある心のいい人が、いい顔をしています。身近な人や行きずりの人の中にも本ものがいるということを、あらためて思います。」と佐藤氏は続けた。ここでいう「普通」はちまたにいる何でもない人であり「地位や名譽の有る人」と對比していると私は捉えた。

バイカル湖の章ではウケを狙った個性と普通にやることを對比して語られていた。「習い事は枠に入って、枠から出でよ」という言葉を使って、普通にやることを重ねてこそじわっと出てくる個性が生まれると二人が言う。

津和野の章でも普通が出てくる。安野氏が「私はね『普通にやればいいのになあ』といつも思っているんです」と。ここでいう「普通」は奇をてらうことと相對すると思う。「大袈裟にしたり奇妙なことをせず、普通の、ごくごく普通の時ほど、こちらの胸には迫ってくるものです。」とも安野氏は語っていた。

対談を読んで思ったことは、実物を超える作品を手掛けるようになるには日々の積み重ね（これも「普通」と言えると思う）、デッサンや粘土をこねる、写真ではなく実物に触れることが大事ということ強く感じた。普通であることは簡単そうだが実は難しいし面倒なことではないか。普通であることをすつ飛ばしては特別な何かになれない。

今月の読書会で話に出た「絵に描いてあるリンゴと本物のリンゴを比べたとき、絵のリンゴのほうがいいってことは、どういうことなんだろう」について私が思うことも書いておきたい。本物のリンゴはそこにあるだけ、存在しているだけの物体である。絵に描いてあるリンゴは描いた人がリンゴから感じた、見えていること以外も表現し、つかみ出せたから実物を超えたのではないか。対談の中では「作者のあらゆる哲学的なものや、思想的なものなどが投影できれば、絵のリンゴのほうが実際のリンゴよりよく見えてくる——」と佐藤氏が語っていた。ほかの章では「見る力」という言葉を使って対象から何かをつかみ出せるか、と表現されていた。

課題本の感想文を書いていて「書きたいことはあるのにどう書けばいいのかわからない、うまく書けない」と悩んだ。喉元まで出かかっているのに言い表せないもどかしさも感じた。しか

し不思議なのは考えることは楽しかった。自分なりの答えが磨りガラスの向こうにぼんやりと見えているのにはっきりとは見えない。でも今感じていることを書こうとする。これを続けていたら何かが見えてくるのではないか、とも思った。

2021年11月

課題本 『ポプラの秋』

湯本香樹実/著 新潮文庫 1997年

広島県立図書館の貸借都合のため、課題本が10月と入れ替わりました。

「ポプラ荘の 魔法使い」

講師 吉川五百枝

「不死ならば 何も愛しく思えない 枚方 リリカ」

川柳欄では、そうだ、そうだ、と思える句によくであります。特に、例会でテキストになった本に関連することなら、こうして引かせてもらうことも多々あります。「死」にも、愛しさを産む働きがある。リリカさんが目をとめた働きを、私もこの小説で見ました。

誰もが経験しなければならない「死」。しかし、誰も自分の経験を語ったことのない「死」。

それなのに、「死」を文字で語ろうとする小説がたくさんあるのは、「死」には働きがあって、生きている人間を動かすからではないかと思います。

体験できないことを表すときは、ファンタジーの手法を採られることが多いのですが、ファンタジーは多義です。私はここでは「異世界」ということばを想定しています。この世の衣を纏いながら、現世とは異なる世界を湧出させます。まるで現実のような「生者のファンタジー」。

「死」の周りのことを描くことしかできないという事実は、読者も書き手も織り込み済みです。ファンタジーとして書くしかないことなのに、作者は『夏の庭』でも今回でも、「死」を書こうとするのです。何が書きたいのだろうかと思いつつ本を開きます。

「愛しく思う」というのは、「死」の働きなのだ、と川柳は語ります。

主人公である千秋は、父親の死を経験しました。しかしそれは、〈父は、どこへ行ってしまったのか。〉という疑問形で受け止められています。6歳7歳という千秋の年齢では、「死」を抽象化するのは無理なのです。

この「死」は、千秋にとっても、千秋の母親にとっても、突発的な暴力的な働きであり、心を不安に陥れる冷酷な働きでした。ポプラ荘の間借り人として引っ越してきた母子は、うちのめされていました。

「死」がこういう働きをすることを、身近に何度味わってきたことか。

病が昂進し、もう転移の痛みが全身に回った人から送られてくるメールに、返信しなければならない苦しさ。私も「あなたは、ガンです。」といわれて死を覚悟したこともあります。だからといって、「薬がきかなくなったんよ」という人に「痛い躰を離れて、還るところがあるのよ、だいじょうぶ」とメールを返すには、どれほどの通信を重ねなければならないことか。何度も、力ない自分をまざまざとみせつけられました。その周りの人も、時間と共に衰えていく大切な人を眼前にしなげながら、波打つ心は嵐の中にいるような様子を示されます。しかし、ただ見ることしかできないのです。それが現実なのです。

ところで、小説を読んでいる人は、読んでいる時点では、生き残っている人だけです。

小説『ポプラの秋』も、生き残っている読者にむけて書かれています。読者が寄り添うのは、生き残っている人。どうやら千秋の父は自死だったようですが、この父がどのような苦悩や絶望や諦念の中にあつて自死を選んだか、そしてその結果をどのように思っているのかはもう知ることができません。書くとなれば、これもファンタジーとなってしまいましょう。

作者は、生き残っている読者に、生き残った者の現実を描きながら、その現実に向き合うかを、寄り添えるように丁寧に導いていきます。

ある夜、千秋にかかってきた風のような雑音だけの電話。間違い電話だったかもしれないが、千秋には、父からの電話だと信じられました。

〈私はもう父を見失うことはあるまいと安心することができた。〉

「父はどこへ行ってしまったのか」と幼い心に抱いた疑問に対して、「父はいる」という答えが返ってくる。もう、ファンタジーの手法だと思います。全編を貫いて登場する大家のおばあさん。「魔法使いのおばあさん」のイメージです。

〈あんたが大人になってもまだこの世にいるなんて、考えるだけでぞっとするよ。だけどまあ、ひとつがんばってみるかね〉。本当に、長生きしました。

その大家のおばあさんが病気になったとき、〈おとうさんに「おばあさんのびょうきがなおりますように」とおいのりしたら、おとうさんがでんわをくれたのだ、といったら、おばあさんは、「それは、よくおいをいわねば」といいました。〉死者からの電話をうけとったという幼子に対して、そのまま肯定して受け入れるおばあさん。これぞ魔法使いだなあとと思います。ファンタジーには、現実と異世界を繋ぐ魔法使いが必要なのです。

大家のおばあさんに、亡き父に手紙を書くという手立てを暗示されて、千秋は、せっせと手紙を書き始めます。おばあさんは、その手紙を預かって死後の世界に行ったとき配達してあげるのだと千秋に「秘密の役目」を話しました。

後年の千秋にも、〈私がああの不安な日々から抜け出すことができたのも、眠れない夜にかかってきた無言の電話を、父の電話だと信じることができたのも、手紙を書き続けたおかげでないと誰が言えよう〉とわかっているのです。

苦しいとき、それを自分から放して、つまり話して、時間を吸い込んで胸を広げることは、一つの方法だと色々な学者さんも認めています。

千秋も、〈手紙というのは何かに運ばれて行ってこそ、書いた者の心が解き放たれる。

母に、時間をあたえてくれてありがとう〉千秋自身も時間を与えてもらったのです。

ポプラ荘の魔法使いは、沢山の人に、魔法の粉を振りかけたようで、そのお葬式は多くの人の集まりになりました。あのおばあさんは、どこに還ったのだろう。ドイツのブロッケン山か、竹取の物語のように東の海の蓬莱山か、お経の中の須弥山か。

ファンタジーは、沢山の人によって書き継がれています。

ポプラの木は、背が高くすっきりと立っているイメージの落葉樹です。作品ののなかでもそれぞれの季節に応じて役割を果たしていました。

〈ポプラの木は、行き場がないなんてことはかんがえない。今いるところにいるだけだ。また仕事をしよう。〉時間に介護された千秋は、いずれ看護師の仕事に戻り、心にポプラを抱いて

誰かの魔法使いになるのではないのでしょうか。

「死」があると知るからこそ、「愛しい」という思いがわく。人を慈しむ思いの源泉は、誰にも平等な「死」なのかなと思います。

読書会の余韻の中で「三行感想」

◆【 KT 】

6才で父を亡くした千秋と母親の葛藤。ポプラ荘の大家 おばあさんの不愛想な中にあるやさしさ。

「手紙は何か運ばれて行ってこそ書いた者の心がほんとに解き放たれるものだから」は印象的だった。

終盤に手紙で知る母の気持。父の死の真実。みんなの愛情を感じ千秋が生きる勇気を取りもどして良かった。

やさしさがあふれていて読みやすく温かさが残った。

いつも浅くしか読むことが出来ない私にとって「どれだけその本を深く読むかによって違ってくる」の言葉は痛かったが、いろいろな感じ方を聞くのが楽しい。

『ポプラの秋』を読んで

◆【 TK 】

児童書でファンタジーかと思って楽しみました。が、最後の 20 ページで一変でした。子供に自死とか身近な家族の死についてえがかれていたのです。

サンタクロースのように子供に信じさせて夢と希望を与えたおばあちゃんでした。サンタクロースは届けに来ますが、おばあちゃんが届けてあげるという設定です。最後に考えてみるとお母さんはわざと子供をおばあちゃんのことを知っていてこのアパートに引っ越したのでしょうか？

お父さんが亡くなりお父さんはどこに行ったの？と女の子は考えて不安になっています。マンホールにひょっこり落ちてしまうのではないかな？忘れ物をしていないかな？鍵をかけ忘れていないかな？不安な毎日で友達とのコミュニケーションもうまくできないのです。これって大人もそうですね。毎日怖いニュースを見聞きしてそう感じています。

ポプラとか青空を見て日常の憩いを感じおばあちゃんとおやつを食べ手紙を書きます。大人でも最近三行日記を書くことが流行っています。声を出して読むことも気持ちを整理する事ができるらしく、目標について書くのも良いらしいのです。

お母さんはお父さんと子供が性格がそっくりなので心配しています。そして再婚して大人になった子供とは一緒に生活をしていません。事情はあるだろうけど、家族になれない寂しさを一生感じるだろうと思います。

そして後書きですが、子供の前で何気なく出した言葉によって子供にずっと影響を与えてしまう事があるのを知り子供をつまづかせない言葉に気をつけたいと思いました。

おばあちゃんとイエス・キリストはお父さんの仲介者となる事ができました。最近家族が揃えない人が多い時代なので子どものたちはこの本を読んで力を得てほしいです。

◆【 R子 】

湯本さんの絵本『くまとやまねこ』が大好きな私。いきなり仲良しの小鳥の死に直面するくまですが、周りの動物たちはくまの心を分かち合うことはできないでいる。そんな時、一匹のやまねこがくまの心に優しく寄り添うことで心を解きほぐすことができた。やまねこもまた、大切な友達を亡くす悲しみを知っていたからですね。バイオリンとタンバリンの優しい音色が聞こえてきそうです。涙なしでは読めない絵本です。

同じく『ポプラの秋』も『くまとやまねこ』繋がり、湯本さんの生と死の世界観を優しく繊細に表現されていてすぐに引き込まれていきました。

ちょうどその頃、友達(夫)が突然大病を患い生死をさまよいながら病と闘っていました。あまりに突如なことでどう自分が受け止めてよいかわかりませんでした。周囲の人は、「あまりのことで、奥さんに頑張ってもらえね。とは言えないし、言葉のかけようがないよね」「今は、見守るしかないよね」と言っていました。しかし、何か自分にできることは？と自問自答し、おばあちゃんがいるからお弁当作りをしてみようと思い立ち、時々彼女に届けながら、彼のことを聞き一喜一憂していました。

それでも、「このかわりには相手にとってはしんどくなるのだろうか？」と思う毎日でした。

読書会で、吉川先生から「なぜ命は大切なのか」それがきちんと整理できていれば、人はおせっかいではないとお言葉をいただきました。帰りの船の中で、その言葉を繰り返しながら、「たった一つしかないから」「その一つしかない命は現実には蘇らないから」「美味しいものを一緒に喜び合って食べられなくなるから」など、とても幼稚な発想での自分しかありませんでした。

その夜、彼の訃報が届きました。闘病し始めて21日しか経っていませんでした。やっぱり命は蘇らない。とても悲しくて悔しい思いでした。彼女のしんどさを考えたらいたたまれませんでした。

『ポプラの秋』に出てくるポプラ荘のおばあさん。とても不愛想だけど優しさを感じるおばあさん。おばあさん自身が悲しみを乗り越えて生きてきた人だからこそ相手にきちんと向き合って寄り添える。私自身もこんなお年寄りになって死んでいきたいと思います。

彼の初七日、友達を誘ってお参りに行きました。彼は生前『仏説阿弥陀経』が好きだと言っていたそうです。みんなでたどたどしくお経を読み、夜遅くまで話し込みました。『ポプラの秋』に出会えて本当に良かったです。それに、読書会の皆さんが私を受け入れてくださったことを嬉しく思いました。

◆【 T 】

突然のお父さんの死。6歳だった千秋は父の死を理解できなかった。どこに行ってしまったのか、一体どういうことなのか、どうして急にいなくなってしまうのか…

父が亡くなったことによる大きな不安を感じると共に、亡くなったことで母が感じた悲しみ・後悔・戸惑いの感情を受け止め千秋は神経症になり日常生活を送ることができなくなる。

そんな千秋の気持ちを温かく見守り、ほぐし、寄り添ってくれたのが「ポプラ荘」の大家さんだった。大家のおばあさんは、子どもにねこなで声一つ出すわけじゃなく、自分から話しかけてくることはめったになかったが質問すれば答えてくれた。

おばあさんは、お父さんに手紙を届けてくれると言った。その言葉を聞き千秋はお父さんへ手紙を書き始めた。手紙を書き続けることで、千秋の心はだんだんと解放され、手紙の中でお父さんに語り掛けることもできるようになり、思い出してもつらくないほど立ち直っていった。

大家さんのたんすの引き出しの中には、千秋の手紙と共にたくさんの人の手紙が入っていたが、大家さん自身の手紙もたくさん入っていたのではないだろうか？人の苦しみがわかり手を差し伸べてきた大家さん自身も大きな苦しみを背負って生きてきたんだろうなと思われる。亡くなった先生への手紙、駆け落ちをした娘を嘆き心配し続けたであろう自分の両親への手紙、子供とともに残され辛い日々を送ったであろう先生の元妻への手紙…

大家さんの葬式で、お母さんの手紙を読み、千秋はお母さんや大家のおばあちゃんの愛情を感じた。お父さんが亡くなって母と娘の関係にすれ違いがあったが、やっと寄り添うことができたように思った。

◆【 N2 】

私もこのおばあさんにポプラ荘で会いたかった。

突然父親を亡くした七歳の千秋。彼女の不安定な精神状態を優しく距離を取って、からかうようなさりげない言葉を投げかけながら見守っているおばあさん。死者に手紙を書くことで死の怖さと寂しさを乗り越えていく人々。手紙を書くことによって日々薄皮を剥ぐように寂しさや悲しさが薄らいでいく。その手紙を自分があの世に行ったら配達してあげると秘密の約束をするおばあさん。本当に届くと真に受ける人がどれだけいるかは解らないが、手紙を書く時間、その手紙が届けられると信じる時間には、亡くなった人と繋がる事が出来るのは確かだ。読みながら自と涙がこぼれる所もあり千秋の再出発の決意と共に私にもポプラの葉を透かし爽やかな風が吹いてくるようだった。

◆【 K子 】

ポプラ荘に住む人達のお話です。シンボルのポプラの木が**デン**と立っています。シンボルになる木は別にポプラでなくてもよかったのでは…例えば常緑樹の松とか？いいえポプラでなくてはいけなかったのです。四季が必要でした。四季に合わせて、住人の心の機微が表

現されています。「ポプラ」と言う木の「イメージ」ラテン語のポプラの「意味」作者はすべてに緻密な計算をしています。主人公の**千秋**と言う少女の6～7歳から始まり27歳の時まで彼女の心をいつも苦しみ(?)占めていた事の事実が最後に手紙によってわかるのです。登場人物のそれぞれが**負**と思われるものを持っているのです。自分の心の内を吐露する手紙をポプラ荘の大家のおばあさん(彼女はすごい傑物だと私は思いました)の家の古いタンスの抽出しに預けるのです。最終章でおばあさんが亡くなり盛大な葬儀(おばあさんに心を通わせていた人々の集まり)が行なわれ、例のタンスの抽出しが開けられるのです。まさにノスタルジーを感じます。手紙は母からのもので千秋が前向きに生きる道につながります。彼女が長年抱えていた事を解決する手立てになったのです。

全編から作者の根底に流れている「ていねいさ」死への「むきあい方」など胸に迫るものがありました。

◆【 F 】

今回遅れて参加したので、皆さんの感想を読めるのが楽しみです。前回は忙しくて感想文を書けなかったので今軽く触れておこうと思っ、あれれ何を読んだのか思い出せません。半年前に読んだ本の形にできなかった(自分の中で完成した途端消えてしまった)感想文は断片的に思い出せるのにやれやれもう。おそらく「感想文を書くぞ!」「なんとか形にしよう」と思い続けて過ごした日々記憶を繋ぎ止められる何かがあって、最初から書くことを諦めていると、本を読んだ記憶すらも飛んでいってしまうようです。一つ勉強になりました。

今回の『ポプラの秋』も、読みおえて心の中に残って思い出せるシーンと頭の中に沈んだようで思い出せない(そういえばそんなシーンもあったなあという)シーンに分かれます。ポプラ荘に出会うまでの回想は全く抜け落ちていましたし、たくさんのページを占めていた(重要な?)はずのエピソード…教会、お通夜…も話に上がらないと思い出せなかったです。

ちゃんとして。話の筋を意識し作者の意図を考えながら、演出家にでもなったつもりで読めば幼少期の出来事が主人公の人格形成にどんな影響を及ぼしたのか等等、本の中にあるはずの色々な事に向き合えるような気もしますが。どうしても今の自分を覆っている「ええかげんさ」は実体験を出発点にして考える特徴を有しているので、なかなかうまくできません。実体験を出発点にして自分と物事を照らし合わせて思考するという選択は、自分の視野を意図的に狭めることで知らず知らずのうちに世間知らずになっていってしまどこか損をしていると感じる時もよくあります。しかし一方で、自分が全ての出発点になるので相手に対してもハナから他人として、自分が生きてきた中で培った感情的な見方(世間的な常識)を切り離して接することができるので自分の心が強くなったような気もします。5月『鬼の橋』の読書会で、自分は鬼に近いと感じると話したのですが。今ある程度、言語化できた自分の精神性。自他を分けて善悪を超えて接し方(行動)を選択できるようになった自分は、非世間的で、鬼の立場にある気がします。

今回の作者は、ありそうな気がするファンタジーと現実のすれすれ、異世界を書ける作家だという話をされた時。(ファンタジーの部分が)現実にはありえないと断言された時、自分は久しぶりに自分の好きなものを否定されて傷ついた時の気持ちを思い出しました。

というのは、自分の中で作者は「自分が友人を亡くした後に感じ続けている死後の世界の存在を自分と同じように認知できる存在」のように感じていたからです。

お葬式が終わった後、火葬場に連れ去られたことに怒りを覚えた自分は、できるだけ高くして360度見渡せる場所へ行き5日前に召された友人を探しました。火葬場の煙は無煙化されていて目に映りやしないのですが物理現象として天へと立ち上っている煙を探して、ついに光る雲の中に彼を見つけたのです。あの時から自分は、空に友人を感じては地上では味わえない速度の風にまたがって世界中を旅していると思い心の中で語りかけます。そして、屋上駐車場からの帰りに妄想した死後の世界の旅の物語を反芻して、自分が旅先で見た光景に重ね合わせます。

◆【 MM 】

父親の死から始まる物語。主人公に起きた出来事とファンタジーがあわさって私の好きな物語だった。

死んでしまった父に手紙を届けてくれるというポプラ荘の大家であるおばあさん。最初の方は怖くて近寄りたかったのにいつのまにかおばあさんに惹かれていた。おばあさんもつかず離れずで見守ってくれたり助けてくれたりする。

おばあさんの死後わかったこともいろいろあって、父親の死についての真実や母親の想い。おばあさんに助けられ救われた人たちのつながり。おばあさんの死後にも世界がふわっと温かく広がっていく感じがとても好きだ。

今月は私は途中から参加したのだが、心に残った言葉は「自分から自分を自由にする」「なぜ命は大事なのか」。自分の感情をコントロールし自由になることは頭ではわかっていたつもりだが、「自分から自由になる」…ふーむ。これは一朝一夕で理解したり身につけたりできることではなく、これからも時々思い出して温めて考えながら大切に扱うものになるだろう。「命はなぜ大事なのか」、これについての私の今の考えは、命は一つしかないから大事なのではないか。リセットができない。命のことに関しては読書会で話がとても広がったようで、それを通して聞けなかったのが残念だ。

2021年12月

課題本『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』

加藤陽子/著 朝日出版社 2009年

「80年目の12月8日」

講師 吉川五百枝

著者の加藤氏は、昨年「日本学術会議」の再任拒否を受け、“時の人”になりました。拒否の理由は語られないまま今に至っています。忘れてはならない政治の流れです。

日本の現代史はさらっと学んでは居ますが、年代の前後関係は殆ど霧の中。それを強力に助けてくださったのは、例会1カ月前に参考資料として年表と地図を示してくださった当番のN2さんです。読みながら、赤や青色で資料をたどったおかげで、なんとか最終ページまでたどり着きました。

今の私の年代では、第2次世界大戦が日本での戦争として一番身近です。私の1945年8月は、焼夷弾の下を逃げ惑っていました。

「どうして戦争に突入したのか？」幼い時からずっと持ち続けた疑問です。そしてこの12月のテキストが『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』となって、向き合うことになりました。

加藤氏は、多くの事例を対比しながら類推して考えなさいと言われていたようですが、とにかく、加藤氏のフィールドをお借りした一ヶ月でした。

たまたま12月の例会日が8日になって、80年前の開戦日と重なりました。偶然です。

真珠湾攻撃で始まった太平洋戦争ですが、1941年12月8日が突然来たのではない。

けれど、それを幕末まで遡って日本の進行状態を集中的に読み進める事ができたのは本の力のおかげです。日清、日露、第1次世界大戦など、一章ごとに「そんなことがあったのね」と、学校時代に習った知識を引っ張り出しながら読みましたが、満州事変あたりからは、学校知識がありません。受験に間に合わない授業はフルスピードでした。

知らないことの多さは、知る驚きの多さです。

満州事変や日中戦争の一章は、私にとって、この本の最大の山場でした。

事前の資料として頂いた地図が大活躍です。日露戦争以後、日本の権益にかかわる地図上の点が、だんだん半円形の線になるのがわかります。そしてその線の周りの地名が、それ以後の事変や衝突の際に出てくるのがわかりました。

満州に日本から出かけていった人たちの話や、敗戦で命からがら帰られた人の話などは、なまなましく聞いた記憶はありますが、どのような国の動きだったのか、あらためて整理をすることができました。

満州事変の武力行使に対して、当時の人々が殆ど反対していないことは驚きでした。そこまで、人々の意思統一がなされていた。日中戦争(私の幼時の記憶では、日支事変)に積極

的意味を見いだしていた。満蒙政策は、日本国民の主権が脅かされ生存の基本原理が侵されることに対する反抗だという雰囲気満ちていたようです。

協調外交は飛び去り、これらの思考が、日本の満鉄守備兵に基礎を置く軍隊の侵攻を支えていたのです。日露戦争(1905年終戦)から第1次世界大戦(1918年終戦)を経て1931年満州事変、1937年日中戦争勃発まで、およそ30年の間に、日本、朝鮮半島、中国、ロシアの状況が大きく変わったのだと認識できました。平安時代400年、江戸時代260年の変化に比べて、激しい変化に思えます。現在に近いだけ資料も豊富で、加藤氏の説明も細かく資料を提示されています。学校知識では網羅できず、授業時間が残り少ないのもあってカットされたのかなと、自分の学習力は棚に上げて、知識の少なさを了解しました。特殊権益を巡って(自分の国でもないのに、他国同士が線引きして権益圏を取り決めるとは、なんたる不遜な)軍部と外務省と商社の素早い動きも解りました。しかし、その言い訳が、中国は無法者だというのです。それに、将来の対ソ戦争の物資調達を考えれば、当事国たる中国を差し置いて、日本の権益を満たす満蒙を守る思惑も隠せません。そしてついに、1932年満州国という傀儡国家を国家として承認してしまいます。今の時点から言えば傀儡国家ですが、日本人にそれが見えていなかったでしょう。満州国内に、日本軍が駐屯するのです。何事も腹八分が肝要だという人もあったようですが、陸軍は妥協せず新しい侵攻行動を起こして、結局、国際連盟を脱退しました。軍部の行動力に期待したのは国民です。

1937年に始まった日中戦争までの6年間、軍隊に寄せた人々の希望は、計算された組織化の前に、戦闘集団へと染脳されたようです。この6年間で、なぜストップがかからなかったのか。国民への説明を避け、思想染脳を行っていた中心はどんな思想を持っていたのか、国民は討論することもなかったのです。政党内閣は、終止符を打たされました。

加藤氏の書かれた第4章から、私がこれまで疎かった満州事変の前後の事情を教えてくださいました。今だから研究が進み、明らかになった部分も多々ありました。過去に、どのような工作が進み、隠蔽が行われ、筋のねじ曲げが行われたのかも、知ることができるようになって来ています。

実際に地図上で線を引いてみたのも今回が初めてでした。何を求めてこのラインを死守しようとしたのか。

強い英米を相手にして戦う太平洋戦争は、多くの日本人に戦争の意義を明るいものだと思わせました。ということは、満州事変も日中戦争も、強い日本が弱い中国を虐めたのではないかという恐れも持っていたということにはならないでしょうか。そういう陰りを打ち消して危機を煽り、人々をまとめて戦争を継続しようとした人々があったということでもありましょう。

〈日本が戦争をしかけて、中国の対日政策を武力によって変えようとしたことからすべては始まっているわけですが、それは日本側には自覚されません。〉東南アジアの資源の獲得は、戦争継続には欠かせないので、英仏の制空権を押さえたのだ。他国が経済的にも政治的にも日本を圧迫したから日本は戦争に追いこまれたのだという意見もあります。しかしそれは違う、と筆者はいいます。戦争を選んだのは、国民だからです。

戦争責任が問われる。だれに問うのか。1941年、私は生まれました。戦争を選んだ一人となっていました。そこから考え始めます。

『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』を読んで

◆【 YA 】

栄光学園の中学生高校生の歴史研究部員17名と著者加藤陽子さんとの問答形式5日間の講義をまとめた本である。問答形式が斬新で生徒たちの研究熱心さがよく伝わった。テーマが深く重くざっと目を通すだけでも、しんどい思いをした。日清戦争から太平洋戦争まで一体どんな理由があって日本は外国に向けての戦争を始めたのだろうか。

私は日清戦争が外国に目を向けた戦争の入口ではないかと思う。この戦争で有利な結果を収め莫大な賠償金も得た。これを軍資金として次なる日露戦争、韓国併合、満州異変、日中戦争へと続き、太平洋戦争へと突入してゆく。

特に太平洋戦争への動きの中で政府と軍部の緊張したやりとりが目を引く。全ての総合力で米の力は日本の80倍。情報分析の数字からも絶対勝目は無いとわかっているにもかかわらず結論は出ない。石油問題や三国同盟の破棄を請求される等々理由はあったにせよ、今までの戦争から最終的には日本は戦いつつ自己の力を培養することが可能という楽観論を陸軍は報告したとある。楽観論が先行すると回避に努力を示していた海軍の意見は萎む。多分その当時、一般国民はどのような状況であるかも知らされること無く、国の流れに押されてゆく。こういう流れは本当に怖いことだと思う。国民の意見、考えもその流れが本流だと考えられる。これはヒトラーがナチスを統帥したこととよく似ている。

太平洋戦争で日本人だけで310万人の命が消えている。軍の暴走を責めるだけでは済まない。違う意見や少数派の見方が如何に大切なことか。そして最後には残酷極まり無い沖縄戦、広島と長崎への原子爆弾投下で終戦を迎える。

今月の課題本、初めて知ることが実に沢山あり、知ることの大切さを改めて思う。沖縄とアメリカ間の密約文書が日本には無く、アメリカの公文書館から出たりする。

戦争に関して十分に検証が為されていないと加藤さんも書いておられるが、実にそうだと思う。戦地のことだけでは無く、一般国民はその戦時下をどのような思いで生活していたのだろうかと考える。加藤さんは問いかけていた。「もしその時を生きているとしたら、あなたはどちらの立場を選びますか。」

今年は日米開戦80年目、12月に入りテレビや新聞で映像や記事を沢山見た。殊に映像では肉声も混っており、開戦を巡る動きと、戦争が始まってからの残虐な場面も流れた。4年以上に渡る長い戦い、何故、見ず知らずの相手を殺すことが出来るのか、これが戦争の真の姿を表しているのだろう。そこに暮らしている人々と平穏な生活を、誰も略奪したり、殺戮することは許されない。

◆【 TK 】

歴史に疎くテレビで見たり聴いたりするだけで、そこだけ断片的な知識しかなく繋がりがありませんでした。年代もその当時の日本人の歴史の状態も。

今回この本を読んで繋がり具体的な心境がわかりました。そして、今の海外の紛争と経済も関心を持って聞けるようになりました。

真珠湾攻撃から80年でタイムリーな本でもありました。

日本人は原爆のことばかりで反省がないとは、やはり本当だと思いました。中国、アジア等を貪欲に攻略したところに原因があると思います。人のものを勝手に武力で自分の配下におくのを最近のニュースで色々聞きますが、それと同じ事をしていた日本は恥ずかしく思うのが当然だと思います。

民主主義を広めて人の自由を認めるアメリカは偉いと思います。

ベトナム、ロシア、中国、台湾まだまだ現代でも経済外交と共に内紛も絶えません。

世界的に巻き込まれる戦争が1914年から始まると預言されていましたが、これから先ももっともって明確になっていくことでしょう。

◆【 F 】

大切な人が亡くなった時、人はどうして死んでしまったんだろうと答えのない問いを抱え、その答えを求めるように人とは異なる現実を作り出すのかもしれない。と、実体験を通して思っている。客観的に観測されるという意味での正しい現実とは乖離しているので「幻実」と当て字した方がしっくりくるだろうか。

「戦争によって多くの命が失われた後の社会では、新しい社会契約がなされる」と、あった。また「戦争は相手の国の価値観、憲法に対する攻撃」だということも書かれていて(おそらくこれらは作者の持論なのだろうが)目から鱗が落ちたと言いますか、なるほどそういう見方(冷静になって分析をすること)ができるのかと思った。

開戦から80年が経過したとはいえ、まだ太平洋戦争は過去の歴史として切り離して考えることは難しく国際政治や各個人が抱いている国のあり方や教育観と絡み合っていて、個々人で意見が大きく分かれていることを、今回の読書会に参加して、あらためて実感した。

年が明けると自分は30才になるが、この本の元になった集中講義を受けた高校生たち(朝日新聞の切り抜きを持ってきてくださった方がいたので知ることができました!)がちょうど今年30だったので、自分と歳が変わらない。だから、自分の頭の中にある太平洋戦争のイメージや自分との関わりをここに書いておくことは意味があると思うので参考までに書き出しておく。

戦争については小学校で徹底的に教え込まれた印象が強い。実際に戦争を体験した祖父母が身近にいて、話を聞いて作文を書くのが夏休みの宿題だった。8月6日に平和登校があり戦争のビデオ(広島に原爆が落ちた日のアニメ、貞子さんの千羽鶴を題材にした実写ドラマ、撃沈された疎開船対馬丸の悲劇を題材にしたアニメ映画、ジブリの「火垂るの墓」など)を見たり、高齢者から食べるものがなくてひもじい思いをしたことや空襲の思い出を聞かせて”いただいたり”した。(あれ、そういえば・・6年生の夏休みは戦争じゃなくて盲導犬のビ

デオを見た。なんで今年は戦争じゃないんだろうと不思議に思った記憶が今蘇った)。ここで”いただいたり”と書いたのは、当時の小学生の感覚だからで、毎年聞かされてる(?)先生は少し気乗りしていないように見えた。

中学以降は学校で戦争について平和学習することはなく、同級生の中には殺しのゲーム(戦争を題材にしたタイトル以外でも、車を運転して通行人を引くことができる自由度の高いもの。殺虫剤で襲いかかってくるゴキブリを倒してスコアを競う個人が作ったミニゲーム。恐竜のような巨大モンスターを狩猟する今も有名タイトルのゲーム)に興じる者もうようよと出始めた。というより15禁と指定されている創作物には残酷なものも多く年代もあるだろう。インターネットが自由で寛容で広がり始めた時代(小学校5年生ごろにパソコンの授業が始まった頃)だったからこそ残酷なものは学校と相反する価値観の場としてぼくらの手の届く場所にあったように思う。

平和教育の根幹は「命は大事」というシンプルな価値観で、それは戦争に限らず自然災害やいじめ自殺問題も同じように学校では語られていたように思う。そして最近ではブラック企業(過労死)に対して同じ理屈が使われている気がする。ところで、命が大事、それは誰の命だろうか？

芥川龍之介の「蜘蛛の糸」を読んで感じる、たった虫けら一匹にも命を認めて愛しんでやる気持ち。これが「命は大事」という価値観だ！と説明すると分かりやすいだろうか。

↑ これは自分が思い付いたのではなく、道徳関係の冊子か何かで誰かどこかのエライ先生が語っておられたのを妙に納得した体験から自分のものになった考え方。

◇ 命が大事、という人が、私(筆者であり貴方)の命を大事にしてくれるとは限らない。

命に対して今の自分の立場を明らかにすると「蜘蛛の糸」を曲解したようなものと言えいい。虫の命は人の命と同じように尊ぶべきものだし、裏を返せば他人の命は私に仇なす虫ケラと同列になりうる。

部屋に迷い込んだのがカメムシならわざわざ逃がしてやろうとする一方、躊躇なく踏み潰す人がいたら、人格を疑いたくなる。

できるなら何も感じずに命を奪えるような人間は苦しみながら死ねばいいのにと(そうはいつでも実際は、虫に鋭敏に反応できることに驚き、自分にできない事やっけてのけた虫殺しでさえも愛おしくなって話し込んでしまうので)願えるようなイメージの人になりたいと思う。どうして自分が歪んでしまったのかというと、きっかけは明白である。命は大事だと漠然と信じているだけじゃ、自分なんて誰も救ってくれない存在なんだという事を知ってしまったからだ。植え付けられた価値観なんてその後の体験によってどんどん変化していつてしまう。

果たして小学校の時に受けた教育に叛いてしまっている自分は、特別なんだろうか。

大学生の教職の授業で戦争についての講義の中で「第二次世界大戦なんて関ヶ原の戦いと同じに感じる」といった女の子がいた。たくさんの方が亡くなったとか、苦しい体験をしたなんて言われてもそれは過去の出来事で、人類の歴史の1ページで想像できるものじゃないと言いたいのか。誰も口に出している事をしないが、彼女は素直ただただアレが世の中一般の価値観だと思う。2020年(昨年)の時点ですでに、広島でさえ夏休みの平和教育はなくなったと聞くし中高生の間ではスマホで知らない人とチームプレイを楽しめる戦争ゲームが流行していた。

小学校の教育自体が、今は変質しまっているかもしれない。

今年になって、テロリズムと認定される密室の列車内で民間人を標的にした事件が3件あった。社会的にどん底(だと本人が悲観している状態)で失うものが何もない「無敵の人」が起こした事件だという解説に自分は納得する。

彼らは間違いなく自分だ、と感じる人はこの読書会に参加している年代の方達には少ないんじゃないかと勝手な想像が働く。そして、命は大事なのに、どうしてあんな恐ろしいことができちゃうのかと義憤して日本社会の変貌を嘆いたり、されておらんじゃろうか？

彼らは彼らで、私が私であるのと同じように、自分のことは自分でしかわからないし(自分でもわかりきっていないにせよ)とにかく他人が言う私が私であるはずはなく、本当のところ何が原因でテロるのかは分かりようがないけれど今回の課題本にあった戦争の説明が当てはまらないか。

「戦争は相手の国の価値観、憲法に対する攻撃」

国内のテロは、我らの社会を覆っている価値観、常識への攻撃。

作者は最後に今あらためて反省する必要があるを書いてたが、自分はそれは戦争という行為に対してだけではなく、多くの人を亡くした後の社会が新たに作り出した価値観に対してもなされるべきだと思う。命が大切なのは自明の理だ、そこから一步踏み込んだ考え方を話し合いたい。

◆【 MM 】

今年一読みにくかった課題本ではなかろうか。全部を読み切らないまま読書会に参加した。

読書会のあと一週間で感想文を書いて提出するのがルールである。課題本を読み直さないといけないのだが、その合間に違う本を手を取った(読まないといけない本があるのに読みたい本を読んでしまう…)。そこに書いてあったことは今月の読書会で得た言葉と似ていた。私がつい手を取ってしまった本は歴史とは違う分野だったが、歴史について言及していた。「大事なものは、何年に何が起きたなどと出来事を覚えることではなく、歴史上の人物の生き生きとした人柄が心に思い浮かぶこと」「歴史をよく知るという事は、自分自身をよく知るというこ

とと全く同じこと」。この言葉に出会ったときすぐ今月の読書会を思い出した。読書会では「自分がその時代に生きてどうふるまったか」「自分で知ろうとする、考える」「知らないことが考えをゆがめる。だから過去を知る、考える、前に進む」という言葉が出た。課題本の中で著者は中高生にそれぞれの戦争に関していろんな質問を投げかけて生徒に考えて答えてもらっていた。戦争は過去に起こったこと、という認識ではなくその中にいて自分だったらどう振舞ったか、考えたか。

偶然手に取った本によって課題本や読書会で出た言葉が再び私の中に入ってきた。最初に読んだときは情報量が多くて嫌気がさしてしまっていたが、今回は3章「第一次世界大戦」から読んでみた。日本は第一次世界大戦での死者は全体に比べると格段に少なかった。過去の日露戦争で出た日本の死者数と比べても少なかった。しかしこれでよかったと終わるわけではなく将来の戦争についても予測していた。植民地の拡大の理由について他の帝国主義と日本との考え方の違いについても初めて知った。一度は読んでいたはずなのに理解していなかったのだろう。今回はおもしろいというか興味をもって読むことができた。

しかし再度読んでも感想文にはうまくまとめられない。最初よりは戦争を身近に感じる事ができたのに。再読すると戦争に関わった人も人間なのでそれが自分だったら？その時代に自分も生きていたなら？という目線で読むことができた。

学校で日本史を習ったとき、近現代史はぐちゃぐちゃして駆け足で詳しいことがわからなのまま大人になった。知ろうと思えばいくらでも資料はあった。見てこなかった。たまに日本史や世界史の本を借りたが流れをさらうだけで理解はしていなかった。知ろうとはしていなかった。戦争に参加した個人としての本を読んだことはあったが国としてどう考えていたのかという本は読んだことがなかった。今回いろいろな事実を知ることができてああそうなのか！と思ったが自分だったらどうするか、までは至らない。今はまだ理解までいっていないのだと思う。この本はひと月以上あっても全部読めなかった。しかし教科書というか戦争を考える本としてはとても好きな本となったので買うことにする。

2022年1月

課題本『生きて帰ってきた男—ある日本兵の戦争と戦後』

小熊英二/著 岩波新書 2015年

関連本『ヒロシマ消えた家族』

指田 和/著 ポプラ社 2019年

※1月の読書会は「まん延防止等重点措置」発出中のため開催できませんでしたが、3月の読書会で感想交換をしました。

読書会を終えて

講師 吉川五百枝

本が本の記憶をよび寄せることがあります。

抑留の体験記録かなと思いつつページをくりはじめてすぐに、体験者小熊謙二氏(1925～)が、北海道常呂郡佐呂間の出身だと書かれていて、ドキンとしました。もちろん常呂といえばカーリングの町というのがありますが、それよりも、栃木県谷中村の足尾銅山鉍毒被害者が集団入植した地名として記憶にあったからです。

この読書会の2018年12月『生きるこだま』(岡部伊都子著)に続く学習会としての1月に関連本として『谷中村滅亡史』(荒畑寒村著)を選びました。岡部氏推挙の荒畑氏は、悲憤慷慨の口調で、栃木県谷中村を中心にした足尾銅山鉍毒事件の結末が、北海道の佐呂間に入植することで幕引きになったと語っています。1907年、鉍毒被害で住めなくなった谷中村の一部の人は、「土地収用法」によって家屋土地を強制買収され、北海道サロマベツ原野の開拓に苦難の歴史を刻みます。反対すれば「国賊」と呼ばれた谷中村の人々。公害問題だけではなく、政治姿勢の問題として記憶される必要があります。

小熊謙二氏が、ソ連軍の捕虜になりシベリアの荒れ地に立ったのは、1945年20歳の時。政府や軍部の政策に反対すれば、「国賊」とか「非国民」とかと呼ばれる締め付けは、日清、日露戦争から日中戦争、満州事変、第二次世界大戦へと続いていたのだと、前月の例会で『それでも日本人は戦争を選んだ』(加藤陽子著)で読んだばかりです。加藤陽子氏は、幕末から第2次世界大戦までを、数字や残って居る文書を引ながら俯瞰的に述べました。その数字の中の「1」を形成した個人である小熊謙二氏に密着して書かれているのが今月の課題本です。上空を飛翔しながら眺めていた鳥が、急降下して地上に降り立って見るような景色の変化だと感じました。

1945年は、人類がはじめて原爆という非情な手段を戦争に持ち込んだ年として、また、満州からの引き上げやソ連に抑留された年として、それぞれに思いの違いはあるでしょうが、共通しているのは「敗戦」によって生活が一変したという身近な体験だろうと思います。

小熊謙二氏もそうでした。19 歳で召集令状が届いた時点で、“戦争を選んだ日本人“になりました。応召拒否など思いもしなかった青年です。

〈情報がろくにないから判断力も無い〉文中にそう記されています。

今だから当時のソ連軍の満州への侵攻も、連合軍側の密約で侵攻はあり得ると読めますが、1945 年の日本人庶民は、8 月 8 日のソ連の中立条約破棄など想像もしていなかったでしょう。敗戦当時、満州に居た日本民間人は約 150 万人、関東軍兵士は約 50 万人と言われています。そのうち、約 63 万人が抑留されたとのこと。

軍部も政府も、戦争拡大に走る日本の選択が凄惨な結末を導く予想を隠蔽していました。あの日清戦争も日露戦争も、提灯行列をし、万歳を叫んだ日本人庶民だったのですから、為政者による染脳は容易だったでしょう。

シベリア抑留の体験は、色々な人によって語られています。この中にも書いてありましたが、人によって受け止め方や感慨が違います。ソ連軍の満州侵攻は、日本人には「被害の国民的記憶」として語られると指摘するのは加藤陽子氏です。

どなたのお話も、立場によって耐えがたさが異なりました。『人間の条件』(五味川純平 1960 年刊)の過酷な記述も、作者の実体験を背景にしています。それでも体験者の小熊謙二氏は、「あんなものじゃない」と言われたそうです。生きて帰った人でもそうなのです。まして亡くなった人は、どれほどの思いをしたのでしょうか。〈恐怖に近い寒さと空腹、栄養失調、疲弊、まともな感性ではなく、ただ生きていくのに必死だった〉この言葉は、抑留生活経験者の共通言語だったようです。

今回の本は、シベリア抑留の個人的体験記というわけではなく、昭和の年号の始まりの年に生まれた小熊謙二という一人の日本人の一生を追ったものなので、シベリア抑留体験を含んでいても、淡々と時間が流れていきます。戦前の細々した生活物資の値段や状況を示しながら、統制経済のもと、流通が滞り物資が不足していく敗戦時の暮らしの様子も、感情の吐露もなく冷静な筆の運びで進みます。ちょうど、何が起きようと、カチカチカチカチと時を刻む秒針のような筆致だなと思いました。この本の著者である息子の英二氏が父親のことを〈淡々とした性格〉と書いて居るのも、そうかもしれないと思います。秒針の音は、〈自分の経験した戦争の事実について一貫して関心を抱いていた〉謙二氏の心底に続く音でしょう。戦争と軍隊でひどい目に遭った。それを怒ることも知らなかったと冷静に語りますが、帰還兵の消えない記憶を感じます。

加藤陽子氏はデータとして上がる数字や文書を基に日本政府の動向を鋭くつき、小熊謙二氏は、高度経済成長に沿いながら 20 代の 10 年間に 9 回の転居 10 回の転職を経験する一人の生活者として暮らしの変化を語ります。

北海道で生まれ、東京、満州、シベリア、新潟、そしてまた東京という居場所の移動、それにシベリア抑留と結核療養所入所という長期間の拘束状態。題名の「生きて帰って来た男」は、シベリア抑留からの帰還だけではなく、様々な難関をくぐりぬけ生き延びられたことも意味しそうです。一人を描きながら、社会を写し取った膨大な事象の詰まった作品でした。

そして、この 3 月の今、連日メディアが報道するのは、ソ連によるウクライナ侵攻の様子です。ソ連軍に攻め込まれて地下に逃げる人々。防空壕も警戒警報のサイレンも負傷する隣

人のうめき声も、3歳だった私の実体験そのもの。あれから77年たった今、同じ光景をまた見ているのです。

「戦争」にどれほどの言い訳や正当性の主張があろうと、それらは武器を持つ理由にはならない。染脳された私たち同士が、武器を手にしても、結局何も解決しないからです。

世界中が、やきもきしています。

『生きて帰ってきた男』を読んで

◆【 YA 】

著者英二の父謙二の徴兵、シベリア抑留、帰国、そして晩年までの詳しい記録的な本。戦争、抑留等、戦時そのものの体験記録的なものは、帰国出来た人によって、たくさん発表されている。自らが体験した無意味な命をかけての戦いは、辛うじて帰国出来た人の真実だと思う。この本は、帰国後の謙二の生き方がメインとなっている。戦後を一般の人がどのような生活をして人生を送って来られているのか、生活状況が詳しく語られているのは初めて読んだ。その時、その時代の背景の流れや環境、思いもしなかった病気と闘病。職を転々と乍らも生活を築いてゆく謙二。私が印象深かったのが、退職後に社会運動にも身を投じ、戦後補償裁判を起こしたこと。

謙二のようにしっかりと生活を送られた人がいる限り、その反対に戦争での体験が災いして、うまく乗り切れなかった人が必ず沢山存在したことは間違いないと思う。

戦争はいつでも民間人が知り得ない裏で起きている。そしてその民間人が犠牲となっている。即ち民間人一人一人の人生が国の力によって翻弄させられ、消えていることになる。戦争の正体とは一体何だろうか。

◆【 K子 】

抑留生活と言う言葉を聞いた事はあるが、活字になると想像を絶する。それにしても苛酷な条件の中で生き抜くことの出来る人間の強さ。何故に？生きて日本に帰る！この一念のために…。生活の具体例が書かれているので実情がありありと理解出来た。

上から下へ言われるままの生活…かくも人間は考慮・志向を失うものか。いやし(煙草)を与え抵抗する考えを削ぐ。不必要なものを与えるには理由があった。怖いと思った。それにしても作者の記憶の確かさに、ただ唯驚く。

2022年2月

『みんなで学習会』

※2月の読書会は「まん延防止等重点措置」延長のため開催できませんでした。

2022年3月

『2021年度 私の一冊』

芳名	著書名	著者	出版社	発行年
講師 吉川五百枝 先生	『灰色の地平線のかなたに』	ルータ・セペティス 作 野沢佳織訳	岩波書店	2012
	2022年2月、ロシア軍は、ウクライナを支配したいためなのか武力で侵攻を開始した。ウクライナの国民は、「国を愛するから戦う」と言って抵抗の戦いをしている。「愛する国」って何だろう？「国」は顔を持たない。そこに在るのは人間としての営みだ。 この本は、1991年の独立まで、ソ連の支配下にあったバルト3国の苦痛と希望を小説として描いている。今、改めてウクライナに思いをはせながら紹介したい。			
【 C 】	『線は、僕を描く』	砥上裕將	講談社	2019
水墨画なんて全く知らなかった大学生の青山くんが、ある出会いから成り行きで水墨画を描きはじめるのですが、水墨画ってこんなにおもしろい、美しい、刹那的な芸術だったんだ！と私は目からウロコ、でした。 「自らの命や、森羅万象の命そのものに触れようとする想いが絵に換わつもの、それが水墨画だ」 「生きている瞬間を描くことこそが、水墨画の本質なのだ」 …紹介しといてなんですが、この本はあまり感想や紹介文、書きたくないなあなんて思います。どう書いても、薄っぺらい感じがしてしまいます。読んでほしい！そんな一冊です。				
【 YA 】	『彷徨の季節の中で』	辻井喬	新潮社	1969
著者辻井喬(本名堤清二:西武グループ)の自伝的小説。 大企業を背負っての人生は一体どんなものだったのか興味が湧いた。 生まれ乍らにして、そういう環境にあった自分の出自の怒りや嫌悪。そして政財界の鬼と言われた父堤康次郎(小説内は津村孫次郎)への反抗と軋轢。複数の異なる母の数人の子供との諍い。外からは順風満帆に見える葛藤。 私が驚いて惹かれたのが、共産党の国際派に属していたこと。(除名されたが)選ばれない出自、環境の波の中で生きることの重さ、辛さを思う。又堤清二の心身の強靱さに圧倒される。				

【 M子 】	①『1日1語、読めば心が熱くなる 365人の仕事の教科書』	藤尾秀昭(監修)	致知出版社	2020
	※続きは後述をご覧ください。			
【 TK 】	『マカン・マラン 二十三時の夜食 カフェ』	古内一絵	中央公論新社	2015
	※後述をご覧ください。			
【 JM 】	『 黛家の兄弟 』	砂原浩太郎	講談社	2022
	筆頭家老の黛家の三男、新三郎は、大目付の黒沢家に養子に入る。武家の、家としての重みの中で生きざるを得ない兄弟たちの生き様を描いている。読後感がいい。			
	『 マカン・マラン 』	古内一絵	中央公論新社	2015
	シリーズ全4冊。ドラッグクィーンのシャールさんが夜だけ開いているマカン・マランというカフェ。傷ついた人や悩んでいる人たちが訪れ、その料理と人柄に癒されていく。読んでいて自分も癒される。シャールさんに会いたい、マカン・マランに行きたいと思うこと必至。			
【 R子 】	絵本『 あの夏の日 』	葉 祥明	自由国民社	2000
	長崎に原爆が投下された「あの夏の日」を、長崎市の協力のもと、葉 祥明さんが平和への祈りを込めて、壮烈なタッチで描いています。 平和な生活を一変させた、原子爆弾の恐ろしさが伝わるとともに、すべてを受け入れたナガサキのこころが感じられる絵本です。 核兵器も地雷もない ほんとうの平和がくることを願っています。長崎からの深い祈りを 世界の人々に伝えてください。(出版社の内容紹介から)			
【 KT 】	『 夏の庭 』	湯本香樹実	新潮社	1994
	死ぬ人を見たい3人の小学6年生が瀕死の老人との交流によって成長していく物語。			

	<p>死ぬ人が見たい3人の小学生。無気力なお爺さんと小学生の交流からお爺さんはだんだん元気になり小学生はいろいろなことを体験し成長していく。そしてお爺さんの死に出会いさらに成長する。小学校を卒業し、子供時代を卒業し、それぞれの道へ進んでいく。</p> <p>彼らは終生コスモスの庭を忘れないと思う。</p>			
【 E子 】	『あなたは、誰かの大切な人』	原田マハ	講談社	2017
	<p>大人の独身女性が主人公の短編集。歳を重ね寂しさと不安を感じる女性が、かけがえのない人に気が付いたときの温かい気持ちが六編を通して描かれている。7。</p> <p>原田マハの本は、作者自身の選定による絵が表紙を飾っています。それもこの作家の本を読む楽しみの一つです。今回この本を今年の一冊として紹介する最大の理由は、私にとって「向き合う」ことをしてくださった人々の存在に改めて感謝の思いを遺しておきたかったからです。</p>			
【 T 】	『地のはてから 上下』	乃南アサ	講談社	2013
	<p>大正から昭和初期、父親の失策で家族4人夜逃げをし、北海道開拓団として知床半島に入植、惨苦の中で幼い「とわ」が成長していく話。</p> <p>*後述もご覧ください。</p>			
【 YT 】	『ポプラの秋』	湯本香樹実	新潮社	1997
	<p>父親を失くしてしまった8歳の少女千秋は母と一緒にポプラ荘というアパートへ越してくる。新しい場所で生活への不安と期待、大好きだった父がいなくなった深い悲しみが入り交じる中、千秋はポプラ荘の大家と出会う。</p> <p>亡くなった者たちのいる天国に手紙を届けられると話す彼女を不思議に思いながらも次第に心を通わせていく千秋。やがてその言葉を信じ、父への思いをつづった手紙を書いて大家に託すことになる。</p> <p>後に大人になった彼女が蘇った思いをつづった物語である。</p>			
【 N2 】	『魂の殺人 親は子どもに何をしたか』	アリス・ミラー 山下公子訳	新曜社	1983
	<p>教育や躾の名による暴力は子どもたちの魂を粉々に打ち砕き、社会はいずれ手痛い復讐を受けずにはすまない。ヒトラーや少女娼婦クリスチアーネの幼</p>			

	年時代を詳細に分析して、教育の暴力性と非人間性を容赦なくえぐり出した衝撃の本。（出版社の内容紹介から）			
【 Y 】	『かがみの孤城』	辻村深月	ポプラ社	2017
	<p>いじめなどの様々な理由で心を閉ざし、不登校になった中学生7人が、鏡の城に閉じ込められるファンタジーだが、現代の社会問題でもあり、ミステリー的要素に、グイグイ引き込まれて読んだ。</p> <p>主人公は、理解してくれるたった一人の人と、同じような境遇の仲間を通して、次第に、自分の気持ちが言えるようになり、強くなっていく。</p> <p>学校はどうしても行かなければならないとは思わないし、どうしようもできない場所からは、逃げる勇気も必要である。</p> <p>生きづらさを感じている人のあまりにも多い現代、「もう戦わなくていいんだよ」と、理解してくれる喜多嶋先生のような人が一人でもいれば、また、同じような思いの仲間を見つけることができれば変われるのか、と考えさせられた。</p>			
【 K子 】	『蓮如 わが深き淵より』	五木寛之	中央公論社	1996
	誰れにでも理解出来る文章(ふみ)の作制に苦慮する蓮如の生きざま。			
【 F 】	『アウシュヴィッツの図書係』	アントニオ・G・イトウル ベ 小原京子訳	集英社	2016
	※後述をご覧ください。			
【 SM 】	『同志少女よ、敵を撃て』	逢坂冬馬	早川書房	2021
	<p>独ソ戦が激化する1942年、モスクワ近郊の農村に暮らす少女の日常は、突然奪われた。急襲したドイツ軍によって、母親ほか村人たちが惨殺されたのだ。自らも射殺される寸前、赤軍の女性兵士に救われる。「戦いたい、死にたいか」と問われた彼女は、一流の狙撃兵になることを決意する。</p> <p>おびただしい死の果てに、彼女は“真の敵”とはと考え始める。</p> <p>戦後の少女と女性兵士の生き方に一條の光を感じる。</p> <p>だが、今日の前で、ロシア軍がウクライナを侵攻している。もし侵攻下に身を置かれたとき、私は人としての尊厳を保てるだろうか。</p>			
【 MM 】	『誕生日を知らない女の子 虐待 —その後の子供たち』	黒川祥子	集英社	2015

	虐待による心の傷と闘う子どもたち。そして、彼らに寄り添い、再生へと導く医師や里親たち。家族とは、生きるとは？ 人間の可能性を見つめる。(解説/是枝裕和) (出版社の内容紹介から)
--	---

想いがあふれて

◆◆◆【 YA 】 『彷徨の季節の中で』を読んで

大企業を背負っての人生は一体どんなものだったのか興味が湧いた。生まれ乍らにして、そういう環境にあった自分の出自の怒りや嫌悪。そして政財界の鬼と言われた父堤康次郎(小説内は津村孫次郎)への反抗と軋轢。複数の異なる母の数人の子供との諍い。外からは順風満帆に見える葛藤。私が驚いて惹かれたのが、共産党の国際派に属していたこと。(除名されたが)選ばれない出自、環境の波の中で生きることの重さ、辛さを思う。又堤清二の心身の強靱さに圧倒される。

◆◆◆【 M子 】 続き

②『潜匠(せんしょう)』 矢田海里 柏書房 2021

遺体引き上げダイバーの見た光景。3.11 東日本大震災直後に現地入りし、現地に居を構えながら被災した人々の声を拾う活動を続ける。

③『赤ちゃんをわが子として育てる方を求む』 石井光太 2020

令和元年6月民法817条の改正によって「特別養子縁組」の成立要件が緩和された。特別養子縁組とは、実親に育ててもらえない子供たちが別の夫婦に引き取られ、法的に実子同然に育ててもらえることを認める法制度だ。昭和63年に施行されて以来、親に棄てられた子供や虐待を受けた子供などを大勢救ってきた。この法律ができた背景に菊田昇という一人の医師の存在があったことはあまり知られていない。菊田は産婦人科医として、こうして子供たちを救うためにたった一人で国と闘いつづけ、この法律を成立させた。昭和の時代を丸々に生きた65年の人生は、人間の業と抗いつづけた。昇は平成3年4月国連の非政府機関である国際生命尊重会議が設けた「世界生命賞」を受賞。第1回目の受賞者マザーテレサにつづく第2回目の受賞者として選ばれた。受賞理由は胎児を中絶から守り、その人権を訴えたことだった。

④『小説8050』 林真理子 新潮社 2021

いじめにあい、8年間も引きこもりをしている息子の話。裁判をして、自分の心の問題を解決する。大変な事柄を調べ、家族友人弁護士が協力して決着した。民事裁判なので慰謝料という型でしかきまらない。でも心はすっきりした。

⑤『未来の自分に出会える古書店』 齋藤孝 文藝春秋 2020

言葉にはチカラがあります。そのチカラは個人をこえ、時代を超えて伝わっていきます。この本にも、勇気づける言葉のチカラがあることを願っています。言葉のチカラを信じて、力強く生きていきましょう。

⑥『天、共に在り アフガニスタン30年の闘い』 中村哲 NHK出版 2013

様々な人や出来事との出会い、そしてそれに自分がどのように応えるかで行く末が定められてゆきます。私たち個人のどんな小さな出来事も時と場所を超えた神聖なものを感じざるを得ません。この広大な縁の世界で、誰であっても無意味な生命や人生は、決してありません。

私たちに分からないだけです。この事実が知って欲しいことの一つです。

⑦『後列のひと 無名人の戦後史』 清武英利 文藝春秋 2021

最前列でなく、後ろの列の目立たぬところで、人や組織を支える人がいる。役所の講堂や会社の大会議室に集められたとき、たいてい後列にモノを言う人間を、後ろの方から凝視している。群衆もある。彼らは大きな何かを成し遂げたわけではなく、出世を遂げたというほどでもない。多くの見返りを求めない人は誰もこの世界に生存の爪痕を残したいと思うときがある。しかし、生き急ぐ必要はない。良く生きた人生の底には、その人だけの非凡な歴史が残るものだという事を18篇の人生は物語っている。

◆◆◆【 TK 】 『マカン・マラン 二十三時の夜食カフェ』を読んで

ストレスや不規則な生活になってしまっている会社勤めの女性はずいぶん、野菜ジュースとかコンビニでのスナック、弁当等を夜遅い為食べている。そこでひょんなことから23時～開店の夜食カフェに道に迷って入ってしまう。そこで食べた食事で生活が自分のためになっていないことに気づくのだ。

しかしこれだけでは面白くない。この本で読者迄も自分の生活をふりかえさせられるのである。そして生き方も考えさせられる。

このマラン・カランのお店はドラッグキーンのお姉様達のお店で本当は夜食のつもりがお店になっていたのである。そしてドラッグキーンであることに誇りをもった堂々とした振る舞いをしている。女の人のお姉様達に顔色と体調を気遣われ栄養たっぷりの温かい北欧料理を食べることになる。

ところがただ美味しかったでは物語は面白くない。この小説の料理はマクロビオティックに基づくお料理だった。「あなたは陰性の貧血持ちだわ。多分、一日中コーヒーばかり飲んでぎりぎり迄食事をとらずに仕事をしている、そうじゃない？」と言ってそれにふさわしいお料理が解説つきで出てくるのだ。

温かく誇り高い自尊心があり、体に良い生活をして他の人にも気遣っているこんな小説が実に楽しい。お姉様はテレビにでてくる美輪明宏さんとかミッツマングローブさんを思い出させる。都会の狭い路地に見つけた素敵なカフェだった。

◆◆◆【 T 】 『地のはてから』を読んで

上下二巻で少々長いし、方言もあり読みにくいところもあるが、読みだすとぐんぐん引き込まれた。NHK ドラマ「おしん」と時代背景、貧困の中での成長と似通ったところもあり、この時代の貧富の差を考えさせられる。イナゴの害・厳しい寒さ・どん底の貧しさに・・・など北海道開拓団としての大変さが読み取れた。彼らを襲う苦難の連続に、次はいいことが起こってほしい、次こそは幸せになってほしいと願いながら読んだ。

特に印象に残ったのは、母ふちの「どうだことがあったって、お国のいうことなんか信じてあなんね、んめあ話聞かさっても話半分、いんや十に一つ百に一つあつかねあがだと思え・・・。」という言葉や兄直一「とにかく生きろ、生き抜くんだ。」の言葉だ。

国に翻弄され厳しい生活をせざるを得なかったふちやとわ・直一たち。思うよういかない人生ではあるが、強く生き抜く彼らの姿に勇気をもらおう。

◆◆◆【 F 】 『アウシュヴィッツの図書係』

去年のわたしの一冊、夏目漱石の「草枕」から自分は夢を見ることが趣味になりました。体験と妄想がごちゃ混ぜになってしまう夢の中の方が自分の中にしかない自分をはっきりと感ずることができます。延期延期になった課題本『生きて帰ってきた男』は、辞書のように使える本だと思いました。社会学者の著者が昭和元年生まれの父から聞き取りを行いまとめた一冊です。わたしの一冊は『アウシュヴィッツの図書係』、事実をもとにした小説です。

この『アウシュヴィッツの図書係』は自分が参加する以前の読書会で課題本だったもので、どなたかのおすすめで読み始めたのでした。読み終えてからしばらくの間、主人公の勇敢な行動を無意識的に思い出しては活力をもらうことが何度もありました。

読書会に参加した当初、自分は辞書や図鑑、地図のような知識をまとめた本こそ所有した読むべき一冊であると信じていたのですが、この2年ほどさまざまな本に触れる中で考えが変わり、色んなきっかけになりえるから色んな本を気楽に読もうという気持ちが生まれてきました。

子供の頃本に夢中になれたのは、本の中の世界が自分の味方だったから・・・なのではないか？とふと思ひ浮かんだことがありました。冒頭の夢の話に戻りますが、夢の中の自分の行いを恥じたり嫌な気持ちになったりすることはあっても、みている夢そのものは常に自分の味方で自分を守ってくれるものだと思います。

『アウシュヴィッツの図書係』で描かれた収容所の中での教育が子供達に与える力、というものを時が経ってから理解に一步近づけた気がしました。

たぶん人は本を読むべきなのだと思います。それは役に立つとか面白いといった単純なものから考えれば幾らでも難しい理由も見つけられるでしょうが、そういうことは関係なく、とにかく読めばいいんだと思います。理由は読む人それぞれが見つければいいのです。

